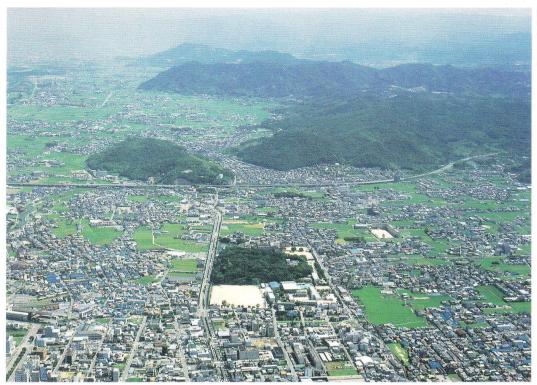
鳴神 V 遺跡 発掘調査概要報告書

-和歌山市都市計画道路松島本渡線建設に伴う調査報告-

1994

(財)和歌山市文化体育振興事業団



鳴神 V 遺跡遠景(西から)



調査地近景(左が北)

序 文

今回の鳴神 V 遺跡の調査は、和歌山市の都市計画道路松島本渡線建設に先だって当事業団が実施したものであります。調査の結果、古墳時代の水田区画や方形区画墓などが検出され、この時期の和歌山市の平野部における農耕地・墓地の考古学的および歴史学的な研究に貴重な資料を提供することができました。特に、古墳時代の水田を検出することができたことは和歌山県下におきましては初めてのことと聞きおよびます。当調査による成果が、郷土の古代史を語る上で、なくてはならない視点を与えることとなり、今後ますます埋蔵文化財に対しての重要性を認識いたしております。

調査は当事業団が平成5年6月から平成6年2月までの9ヶ月行ない、ここに概要報告書をまとめたものです。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査にあたって多大のご協力をいただいた 地元の皆様がたおよび本書編集にあたり種々ご教示を賜わりました先 生がたに厚く御礼申し上げます。

> 平成6年3月31日 財和歌山市文化体育振興事業団 理事長 海野 榮喜男

例 言

- 1、本書は、和歌山市が市内鳴神1014-5~1024-4番地内に計画した都市計画道路松島本渡線建設に先立つ発掘調査の概要報告書である。
- 2、調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約3000m² を1993年6月7日から1994年2月25日までの約9ヶ月間で実施した。
- 3、発掘調査、及び本概要報告書作成は和歌山市教育委員会の指導を受け、以下の関係者でおこなった。

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長

海野榮喜男

事務局次長兼総務課長事務取扱 尾崎好昭

事務主任

小松義博 (調査庶務担当)

学芸員

北野隆亮 (発掘調査担当)

学芸員

木村善晶(")

学芸員補

栗本美香(")

4、遺物整理、遺物実測図作成及びトレース作業等については調査担当者が分担して行い、 以下のものがこれを補助した。

中嶋雅士(和歌山大学学生) • 出縄豢子

- 5、遺跡の地理的環境については額田雅裕氏(和歌山市立博物館)、プラント・オパール 分析は松田隆二氏(古環境研究所)、花粉分析は金原正明氏(天理大学附属天理参考館)・ 金原正子氏(古環境研究所)のご協力を頂き、それぞれ玉稿をいただくことができた。記 して感謝申し上げる。
- 6、概要報告書の作成にあたり、当事業団の同僚及び下記の方々に現地及び遺物整理作業時に有益な御教示・御指導を賜った。記して感謝の意を表します。

中野榮治(近畿大学)、都出比呂志(大阪大学)、石野博信(徳島文理大学)、関川尚功・寺澤 薫・土橋理子(奈良県立橿原考古学研究所)、山本信夫(太宰府市教育委員会)、續伸一郎(堺市立埋蔵文化財センター)、吉田宣夫・藤井保夫・山本高照(和歌山県教育委員会)、上田秀夫・武内雅人・冨加見泰彦・土井孝之(和歌山県文化財センター)、大野左千夫・前田敬彦(和歌山市教育委員会)

- 7、本書の執筆は北野、木村、栗本が分担したが、一部前記の方々のご協力を得た。各分 担の文責は目次に示した。
- 8、写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 9、編集は北野がおこなった。

本文目次

序文	(理事長 海野榮喜男)	
第1章 位置と環境	(· · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
1. 地理的環境	(栗本美香)	
2. 歴史的環境	(栗本)	
第2章 調査の契機と経過	(北野隆亮•木村善晶)	• • 4
第3章 調査の方法と経過		
1. 調査の方法	(北野)	
2. 調査の概要	(北野)	• • 7
第4章 遺構		
1. 微高地上の遺構		
(1) 古墳時代の遺構	(北野)	• • 11
(2) 奈良・平安時代の遺構	(栗本)	• • 15
(3)鎌倉時代の遺構	(木村)	• • 17
(4) 江戸時代の遺構	(木村)	• • 19
2. 微高地縁辺部の遺構	(北野)	• • 20
第5章 遺物		
1. 遺構出土の土器		
(1) 古墳時代の土器	(木村)	• • 22
(2) 奈良・平安時代の土器	(栗本)	• • 28
(3)鎌倉時代の土器	(北野)	• • 30
2. 遺物包含層出土の土器		
(1) 古墳時代の土器	(木村)	• • 31
(2) 奈良・平安時代の土器	(栗本)	• • 32
(3)鎌倉時代の土器	(北野)	• • 35
(4)輸入陶磁器	(北野)	• • 36
(5) 緑釉陶器	(北野)	• • 37
(6) 灰釉陶器	(北野)	• • 37
3. 埴輪	(木村)	• • 37
4. 製塩土器	(栗本)	• • 39
5. 竃	(栗本)	• • 40
6. フイゴ・紡錘車・土錘	(木村)	• • 41
7. 耳環・管玉・砥石	(木村)	• • 42
8. 石器	(北野)	• • 42

9. 馬歯 (北野)・・42

第6章まとめ

1. 検出遺構からの考察

(1)微高地上の方形区画墓について (北野)・・43

(2) 微高地縁辺部の水田区画について (北野)・・44

2. 遺物包含層出土遺物の検討

(1)第4層出土玉石の分布について (木村)・・45

(2)遺物包含層出土の竈について (栗本)・・47

3. 自然科学の調査

(1)鳴神♥遺跡の地形環境 (額田雅裕)・・49

(2)鳴神♥遺跡におけるプラント・オパール分析 (松田隆二)・・53

(3)鳴神 ♥遺跡における花粉分析 (金原正明・金原正子)・・56

図版目次

巻頭図版 鳴神 V 遺跡遠景 (西から)、調査地近景 (左が北)

図版1 調査前の状況(北から)、調査地近景(北西から)

図版2 調査地全景(左が北)、I区全景(左が北)

図版3 II区全景(左が北)、III区全景(南から)

図版4 I 区東壁土層堆積状況(西から)、II区東壁土層堆積状況(西から)

図版 5 I · II 区水田区画 (右が北)、I · II 区水田区画 (南西から)

図版6 I区水田区画(左が北)、I区水田区画(南西から)

図版7 II区SX-11~12間畦畔(東から)、II区SX-13土層堆積状況(南から)

図版 8 II 区方形区画墓群 (上が北)、II 区方形区画墓 1 ・SD-29内遺物出土状況 (北西から)

図版 9 III区方形区画墓 1・SD-55 (北から)、III区方形区画墓 1・SD-55土層 堆積状況(南から)

図版10 II区方形区画墓 3 · SD-40 (左が北西)、II区方形区画墓 3 · SD-40 (南西から)

図版11 II区方形区画墓 3 · SD-40土層堆積状況 (西から)、方形区画墓 4 · SD -32 (上が北)

図版12 II区方形区画墓4・SD-32(南から)、II区方形区画墓4・SD-32内遺物出土状況(南から)

図版13 II区方形区画墓 5・SD-36(南から)、II区方形区画墓 5・SD-36土層 堆積状況(南から)

- 図版14 II区方形区画墓 5 · SD−36内遺物出土状況 (北から)、III区方形区画墓 6 · SD−54 (東から)
- 図版15 II区SK-74 (南から)、II区SK-79 (南から)
- 図版16 II区SK-79土層堆積状況(南東から)、II区SK-81(南西から)
- 図版17 I 区SD-18、SD-19 (南西から)、II区SD-18、SD-19土層堆積状況 (南西から)
- 図版18 II区SD-46 (左が北)、II区SD-46土層堆積状況(南から)
- 図版19 II区SD-46遺物出土状況 1 (南西から)、II区SD-46遺物出土状況 2 (南西から)
- 図版20 I 区SD-12(北から)、I 区SD-12土層堆積状況(南から)
- 図版21 II区掘立柱建物・ピット群(南から)、II区掘立柱建物・ピット群土層堆 積状況(南から)
- 図版22 II区SD-39(北から)、II区SD-39土層堆積状況(南から)
- 図版23 II区SD-20 (東から)、II区SD-20 (西から)
- 図版24 II区SD-20土層堆積状況 1 (東から)、II区SD-20土層堆積状況 2 (東から)
- 図版25 II区SD-27 (南から)、II区SD-27土層堆積状況(南から)
- 図版26 III区SE-01 (南から)、III区SE-02 (西から)
- 図版27 III区SE-04 (東から)、III区SE-05 (南から)
- 図版28 I区小溝群(北から)、II区小溝群(北から)
- 図版29 SD-29出土遺物、SD-36出土遺物
- 図版30 SK-73出土遺物
- 図版31 SK-74出土遺物
- 図版32 SD-46出土遺物
- 図版33 SD-46出土遺物
- 図版34 SD-46出土遺物
- 図版35 SD-46出土遺物、SD-12出土遺物
- 図版36 SD-39出土遺物
- 図版37 遺物包含層出土遺物
- 図版38 遺物包含層出土遺物
- 図版39 遺物包含層出土遺物
- 図版40 遺物包含層出土遺物
- 図版41 遺物包含層出土遺物、SD-20·27出土遺物
- 図版42 SD-12出土遺物、遺物包含層出土遺物
- 図版43 遺物包含層出土遺物
- 図版44 遺物包含層出土遺物
- 図版45 遺物包含層出土遺物
- 図版46 SD-32·36·54出土遺物
- 図版47 植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真
- 図版48 花粉遺体

第1章 位置と環境

1. 地理的環境

鳴神 V 遺跡の所在する和歌山市は、和歌山県の北西部に位置し、大阪府の南西端に隣接している。市域は主に、奈良県の大台ヵ原に源を発し、紀伊水道に向かって西進する紀ノ川によって形成された沖積平野を中心に広がっている。

紀ノ川の北岸、和歌山県と大阪府の府県境には、和泉山脈が存在する。この山脈は砂岩、礫岩、頁岩の互層からなる白亜系の和泉層群によって構成されており、南北幅約10km、東西長約50kmの規模を有する。東の南葛城山(標高922.6m)を最高峰とし、西へ向かって徐々に高度を下げていくのが特徴である。和泉山脈と紀ノ川の間には、幅1~3kmの規模で下位段丘及び沖積平野が形成される。

これに対して南岸には、竜門山地が断続的に存在する。これは、三波川変成帯に属し、 緑泥角閃岩を主体とする結晶片岩によって構成されている。その独立丘陵である花山の西 麓に広がる沖積平野に鳴神 V 遺跡は位置する。

当遺跡周辺の微地形を観察すると、北部は紀ノ川の氾濫原となっており遺跡の密度は低いが、西部の1km余りの地域では、旧紀ノ川の有力な分流によって自然堤防が形成され、弥生時代以来安定した居住適地が確保される。

2. 歷史的環境

旧石器時代 紀ノ川北岸においては、紀ノ川河口近くの山麓部に位置する鳴滝遺跡や、 西ノ庄地区遺跡からナイフ形石器が出土した。南岸では、岩橋丘陵の東麓の総網寺谷、頭 陀寺等で、ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代 近畿で最も早く発見された貝塚として有名な鳴神貝塚をはじめ、禰宜貝塚、吉 礼貝塚、岡崎縄文遺跡が知られている。鳴神貝塚は花山丘陵の南西端に位置し、海抜10m前 後の緩やかな斜面の平坦地を中心に広がっている。中・晩期の土器を中心に、礫器・石鏃・石 錘・磨製石斧等の石器が出土した。また昭和30年には、伸展葬で葬られた女性人骨が検出され、上下の門歯の抜歯や猿の橈骨製の耳栓を持つ等、シャーマン的性格を有する。

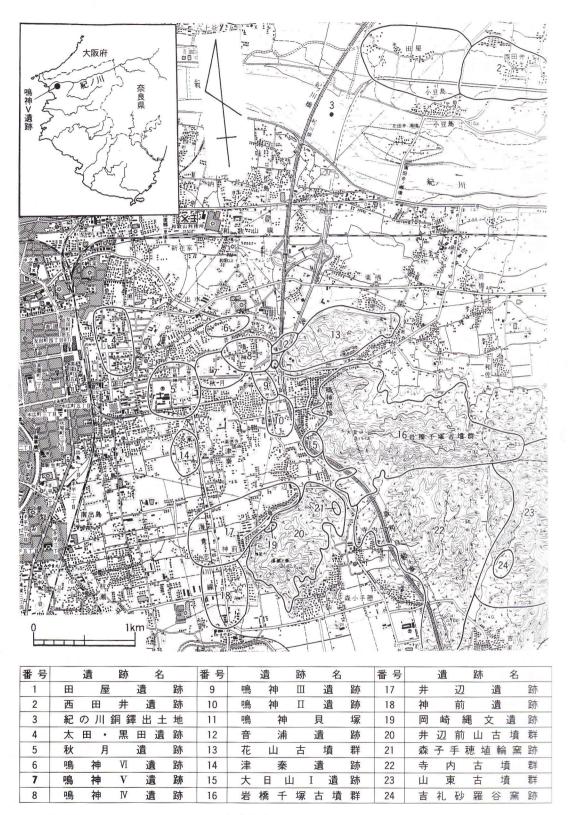
禰宜貝塚は、竜門山系の一つである高積山の西麓に位置し、前期の土器が最も多く、中・ 後期の土器も少量出土している。

吉礼貝塚は岩橋丘陵の南へのびる枝尾根の山麓部に位置する。土器は前期前半の北白川 下層I式から中期のものが出土し、紀ノ川流域で最も古い貝塚である。

岡崎縄文遺跡は、鳴神貝塚から南へ約1.6kmの福飯ヶ峰北西麓に位置し、土器は後期・ 晩期のものが出土している。その他、石匙・石鏃・石錘・磨製石斧が出土している。

以上四遺跡の貝塚の様相から、縄文前期には禰宜地区にあった海岸線が、後期には鳴神・ 吉礼地区へと推移したと見られ、岡崎地区では長い間内湾であったと考えられる。

弥生時代 この頃になると、紀ノ川の堆積作用が進み、その結果西方に向かってかなり



第1図 鳴神V遺跡とその周辺の遺跡分布

広域に陸地が形成されていた。しかし、陸化が顕著であったのは、岩橋丘陵及び花山丘陵によって保護された北鳴神・秋月・有家・太田・黒田一帯であり、それより西は低湿地であり、紀ノ川の氾濫が激しく居住不可能であったと考えられる。

当遺跡周辺の重要な遺跡としては、太田・黒田遺跡がある。この遺跡は、前期・中期を中心とした竪穴式住居跡や土坑、多量の土器などが検出されている。中でも一つの土坑から、前期の遠賀川系の甕と、縄文時代晩期の船橋式の系譜をひく甕が一括で出土し注目されている。

紀ノ川北岸では中期に宇田森遺跡が出現し、続いて北田井遺跡、西田井遺跡などの大集落が旧紀ノ川の自然堤防状の微高地上に営まれる。

後期になると、平野部においては顕著な集落が見られず、紀ノ川南岸では岩橋丘陵の南 方にある滝ヶ峰遺跡や、北岸では和泉山脈の支脈上にある橘谷遺跡などの様に、集落は一 転して平野部周辺の丘陵上に出現する。

古墳時代 古墳時代の遺跡は顕著であり、特に花山丘陵、岩橋丘陵の山麓付近に集落が見られる。岩橋丘陵の西側に所在する鳴神II遺跡では、用水路としての溝状遺構が特徴的である。弥生時代末期あるいは古墳時代初期に開削され、平安時代まで機能していたものであり、特に古墳時代中期には、幅7~8 m、深さ3 m程に整備され、多量の木杭や矢板、木製農工具が検出されたことから、大規模な水田開発が行われたものと考えられる。

鳴神II遺跡の南方では大日山I遺跡が出現する。大日山I遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物が検出された他、滑石製模造品や手づくね土器、鳥形土器などの祭祀遺物が出土しており、重要な遺跡である。鳴神II遺跡西方の秋月遺跡では、昭和60年の調査によって布留式古段階の土器を伴う前方後円形周溝墓や方形周溝墓群が検出された。

この地域で本格的な古墳が出現するのは、4世紀末から5世紀初頭にかけてであり、花山丘陵上に前方後円墳9基を含め、90基余りの古墳が確認されている。その後、5世紀後半から7世紀前半にかけて岩橋丘陵一帯では連綿と古墳が造営され、総数約700基を数える大規模な岩橋千塚古墳群を形成する。

後期の集落としては、花山丘陵の北西麓に音浦遺跡が存在し、前述の鳴神 II 遺跡に続くと考えられる用水路が検出されている。

歴史時代 歴史時代においての良好な遺跡は確認されていないが、太田・黒田遺跡から 白鳳期の軒丸瓦が出土している。秋月には日前国懸神宮が祀られており、「日本書紀」に おいての記述が見られる。また日前宮一帯の地域は、条里制土地区画の痕跡を良好に留め 河南条里と呼ばれ、県内でも最大の規模を有する。

会老女融

日下雅義「太田・黒田遺跡の地形環境」(『和歌山市太田・黒田地域綜合調査地理・歴史調査概報』 和歌山市教育委員会 1969年)

和歌山県史編纂委員会 『和歌山県史』 - 考古資料 - 1983年

和歌山市史編纂委員会 『和歌山市史』 第1巻 1991年

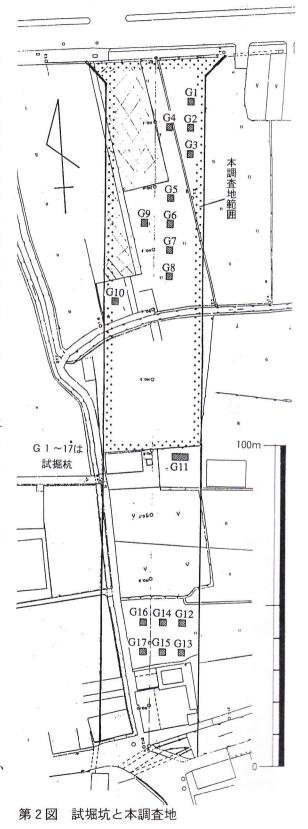
和歌山県教育委員会 『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 1984年

第2章 調査の契機と経過

和歌山市の都市計画道路松島本渡線の 建設区域のうち鳴神1014-5~1024-4 の区間が「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所 在地図」に記載された鳴神 V 遺跡の範囲 内に位置すること、和歌山県が昭和52年 から昭和54年にかけておこなった北側に 隣接する国道24号線の建設に先立つ鳴神 地区遺跡の調査で遺構・遺物が検出され ていることなどから工事に先立ち発掘調 査を行なうこととなった。調査は和歌山 市教育委員会が主体となり、()助和歌山市 文化体育振興事業団が委託を受けて実施 した。

先ず、遺跡の実態及び分布範囲を確認するために試掘調査を平成5年2月8日から3月31日までの約2ヶ月間行った。 試掘対象の東西30m、南北200mの南北に細長い範囲内に2m四方の試掘抗を17箇所設定し、実施した(第2図)。以下試掘調査の成果を説明する。

北半部のG1~G10試掘抗では安定した面をもつ黄褐色粘質土上面で遺構を検出した。南半部のG11~G17試掘抗は北側とはちがった堆積状況を示した。現代の耕作土下に遺物包含層が約45cmの厚さで確認した。遺物包含層を3層に分層し、上から第1層・黄灰色砂質土、第2層・茶灰色砂質土、第3層・灰色砂質土となる。第1層・第2層については時期差がみられず、ほぼ同時期の堆積と思われ、出土遺物から近代の堆積であると考えられた。第3層ではⅣ期の備前すり鉢、瀬戸美濃系天目茶椀、肥前系灰釉陶器椀



-4

などが出土し、室町時代から江戸時代前期の堆積層と考えられた。それより下、標高約2.9mから直径2cm以内の砂利を含む砂質の無遺物層となり北部にみられる 黄褐色粘質土の層は確認できなかった。この無遺物層の上面から土器細片を含む不定形な遺構が検出されたが、遺物はすべて細片でその年代を決定することはできなかった。

注目すべき出土遺物として、G11から 出土した縄文土器深鉢(写真1)、G14か ら出土した瓦質土器蓋(写真2)がある。

以上の試掘成果を受け、試掘範囲の北 半部において東西30m南北100mの範囲で 本調査を行うこととなった。本調査は現 地において平成5年6月7日から平成6 年2月25日までの約9ケ月間で実施した。 調査地を北から I 区、II 区、III 区の 3 調査 区に分割し調査は北から順次行った。Ⅰ 区の調査は平成5年6月7日から9月1 日まで、II区は9月7日から12月2日ま で、III区は12月6日から平成6年2月25 日までの期間を要し、平成5年12月4日 には和歌山市教育委員会が主体となり、 当事業団が協力して現地説明会が開かれ た。当日の参加者は約100名を数え、現地 では検出した遺構の説明を行い、調査事 務所では出土遺物の展示を行うことがで きた。

参考文献

和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 1984年

(財)和歌山市文化体育振興事業団『鳴神Ⅳ・Ⅴ 遺跡発掘調査報告書』 1990年



写真 1 G11出土縄文土器深鉢

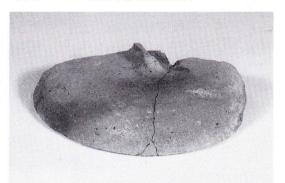


写真 2 G14出土瓦質土器蓋



写真 3 発掘作業風景



写真 4 現地説明会風景

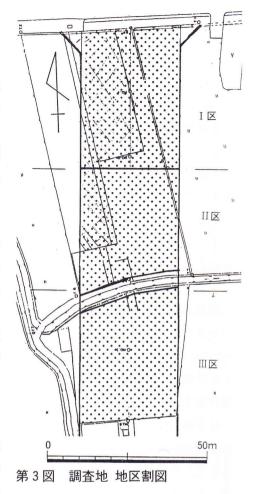
第3章 調査の方法と経過

1. 調査の方法

鳴神 V 遺跡の発掘調査は、東西幅約30m、南北 長約100mの南北に細長い調査区で行った。調査は 排土処理の為に調査地を南北方向に3等分して、 それぞれ北から I 区、II 区、III 区と小地区名を便 宜的に与えた(第3図)。発掘調査はこうした単位 で北側の I 区から順次1 区画ずつ行った。

調査は、機械力(ユンボ2台、ブルドーザー1台、ダンプ2台)によって、第1層(現代水田耕土)、第2層(床土)、第3層(黄灰色粘質土)までを表土掘削と認識し、掘削を行い、以下を人力によって実施した。遺構の検出はI区を北野が、II区を北野・木村・栗本が、II区を木村・栗本が主として行った。その他、調査方法は以下の方針で実施した。

1、溝や土坑などの遺構には土層観察用ベルトを 原則的に1箇所以上設けることとし、2層以上の 堆積が認められたものについては分層し写真撮影 及び実測図を作成した。土層の色調及び土質観察 については、「灰褐色粘質土」など従来通有の呼称



を用いたほか、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』1993年版をあ わせて使用した。

- 2、第4層以下の遺物包含層の遺物取り上げの為に国土座標軸にのった4mメッシュの杭を打ち、地区設定を行った。I区の北東部調査外に仮座標原点を設定し、南方向にS、西方向にWを冠し4m単位(S8W4など)の値を各杭に記入した。遺物の取り上げは北東の杭の値をもって地区名とした。
- 3、平面実測図は、I・II区については1/20の縮尺で航空測量を実施し作成した。遺構の土層堆積状況図、調査区壁面土層図及びIII区の平面実測図については手実測で実施した。なお、遺構内の遺物出土状況図及び特殊遺構については1/10の縮尺で実測図を作成した。4、全景写真撮影は、I・II区については航空写真撮影を実施した。遺構の個別写真撮影は遺構掘削完了時に随時行った。
- 5、 I・II区の第4層中に片寄った混じり方を示した玉石及び埴輪などの出土位置を確定できた遺物については、帝塚山考古学研究所の測量システム「カタタ」を利用して三次元

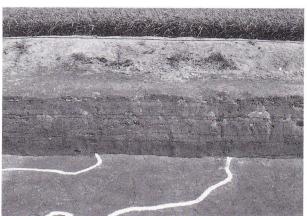
座標内に出土位置のデータを取り込む ことができた。

6、遺跡の水準は国家水準点及び和歌 山県水準点を基準とする。

7、本書で示した遺構実測図の座標値 は国土座標軸を基準とした値で表示し 1=0

2. 調査の概要

調査は堆積土層の第3層までを機械 力(ユンボ)によって掘削を行った。第 1層は15cmの堆積で、暗灰色粘質土の 現代の水田耕土である。上面(現代の 地表面)は標高3.8mであり、周辺との 比高差はほとんどない。第2層は10cm の堆積で、灰褐色砂質土の床土である。 第3層はI区が10cmの堆積を示すが、 II・III区では約5cmと薄い堆積となる。 近世の遺物を出土する。第4層上面で I・II区に小溝群を検出した(図版28)。 これらの溝は現在の水田畦畔の方向と 一致することを確認した。第4層は淡



写直5 I 区 東壁土層堆積状況

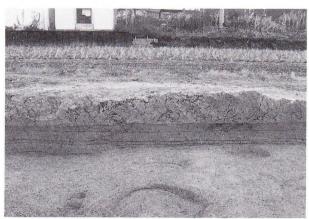
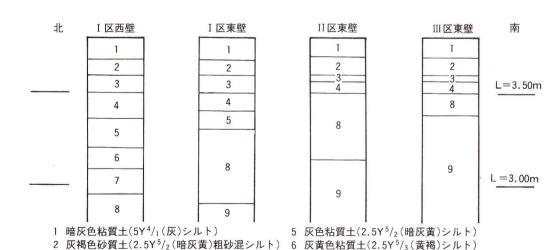


写真6 II区 東壁土層堆積状況

6 灰黄色粘質土(2.5Y⁵/₃(黄褐)シルト)

7 茶褐色粘質土(10YR³/₂(黒褐)シルト)

8 黄褐色粘質土(2.5Y⁶/₆(明黄褐)シルト) 9 暗灰色砂(2.5Y⁴/₂(暗灰黄)粗砂)



第4図 調査地土層柱状模式図

3 黄灰色粘質土(100YR⁵/₃(にぶい黄褐)シルト)

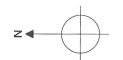
4 淡灰色粘質土(2.5Y⁶/₂(灰黄)粗砂混シルト)

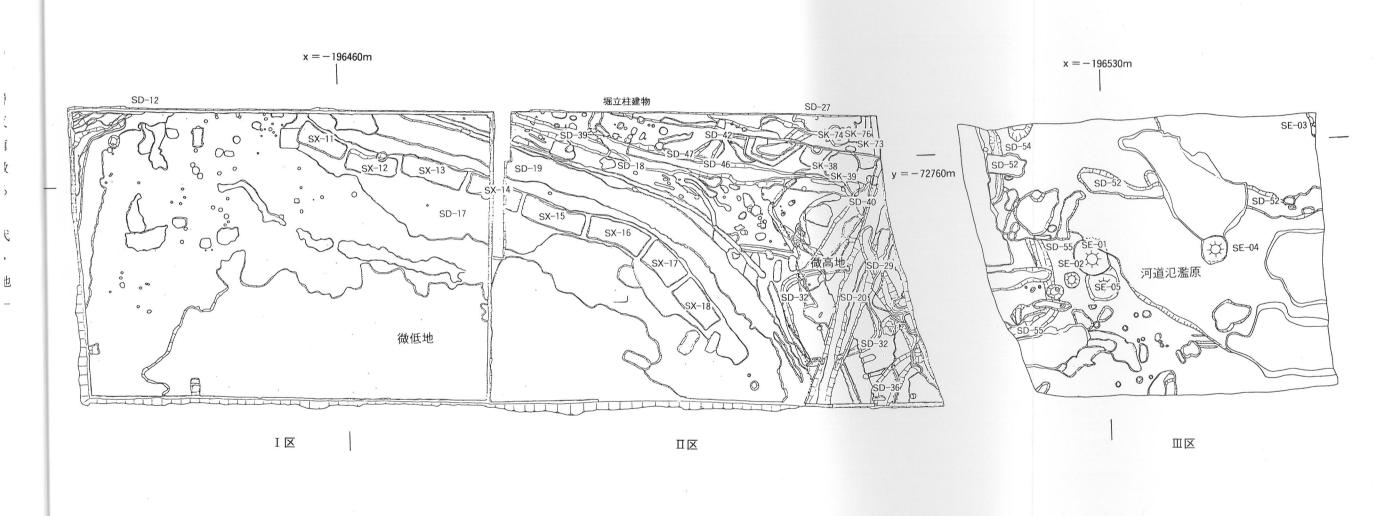
灰色粘質土でプラント・オパール分析によって、イネが検出されており、水田耕土であっ たものと考えられる(第6章3.(2)参照)。堆積の厚さはI区で10cm、II区で5cmと南へ 行くほど薄くなる。出土遺物から鎌倉時代後期~室町時代前期の堆積により形成されたも のと考えられる。第5層はI区全面とII区の北西部に堆積しており、北西に深くなる。I 区西壁で15cmの堆積の厚さをもつ。 I 区東壁で約10cmである。第5層も灰色粘質土でプ ラント・オパール分析により、イネが検出されており、水田耕土であったものと考えられ る(第6章3.(2)参照)。出土遺物からは第4層との時期差はほとんど認められない。第6 層と第7層はI区西部からII区北西部に限られる。第6層は灰黄色粘質土で古墳時代まで の遺物を含む。低地性の堆積であると考えられる。第7層は茶褐色粘質土で、第6層と同 じく低地性の堆積であろう。第8層上面が古墳時代から鎌倉時代の遺構面である。第8層 自体はI区・II区共に、約40cmの堆積の厚さをもち、南になるほど上昇していく(第4 図)。 黄褐色粘質土であり、和歌山県が昭和52年度に行った北側隣接地でも遺跡の基盤層 となっている。III区では約10cmと薄くなるが、削平された可能性が高い。第9層は暗灰 色砂であり、上面の標高はI区では約2.90m、II区では約3.15m、III区では約3.40mと南 に行くほど上昇する(第4図)。これらのことからII区を境に北西に微低地が、南東に微 高地が位置することがわかり、遺構は第8層上面の微高地上及び微高地縁辺部に展開する ことが明らかとなった。

検出した遺構の概要は、微高地上で古墳時代前期から中期の方形区画墓6基、古墳時代後期の遺物を大量に出土した溝SD-46、平安時代の溝SD-39、鎌倉時代の溝SD-20・河道SD-27・石組井戸5基、江戸時代の河道氾濫原・溝SD-52などを検出した。微高地縁辺部では古墳時代前期の水田区画8単位・溝SD-19、微高地縁辺裾を区画する溝SD-18などを検出することができた。

参考文献

和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 1984年 奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第49冊 1986年 (財)和歌山市文化体育振興事業団『鳴神 IV・V遺跡発掘調査報告書』 1990年





第5図 鳴神V遺跡遺構平面全体図

第4章 遺 構

調査地が南東部の微高地と北西部の微低地に二分されることは先に述べたが、遺構が分布するのは微高地上とその縁辺部に限られる。そのことから、遺構は微高地上に立地するものと微高地縁辺部に立地するものに二分して記述を行う。

II区からIII区にかけて展開する微高地上には古墳時代前期から中期の方形区画墓群や古墳時代後期の溝・土坑、奈良~平安時代の掘立柱建物・溝、鎌倉時代の溝・河道・石組井戸群、江戸時代の河道・溝などがある。微高地縁辺部には古墳時代前期の水田、古墳時代後期の区画溝などを検出した。

1. 微高地上の遺構

微高地上では溝・土坑・ピットなど多くの遺構を検出した。ここでは、主な検出遺構について、古墳時代の遺構、奈良・平安時代の遺構、鎌倉時代の遺構、江戸時代の遺構の4項目に分けてそれぞれ記述を行うことにする。

(1) 古墳時代の遺構

古墳時代前期から中期に造営されたと考えられる方形区画墓群(図版8)と古墳時代後期のSD-46、SK-74・79・81について報告する。なお、方形区画墓は6基検出したが、埋葬施設は全て削平されており、区画溝によって認識したものである。

方形区画墓1 (第6図、図版9)

方形区画墓 1 は一辺14.20mの隅丸方形の基底部をもつ。II区とIII区の間の現代の用水路に分断されるため、II区はSD-29、III区はSD-55と名付け遺物の取り上げを行った。区画溝は最大幅1.90m、深さ約35cmを測る。土層の堆積状況は3層に分層することができた。上から、第1層・灰黄褐色粘質土、第2層・褐灰色粘質土、第3層・灰色粘質土の順に堆積する。これらの区画溝は完形土器が多く出土しており、北東隅で第3層から土製支脚、北辺の西寄りで第2層から土師器二重口縁壷(第22図3、図版8・29)、西辺南寄りで第2層から底部穿孔された土師器広口壷、南辺中央で第3層から土師器小形丸底壷(第22図2)が出土した。出土遺物から、古墳時代初頭のものと考えられる。

方形区画墓2 (第7図)

方形区画墓 2 は一辺10.8mの隅丸方形に近い基底部をもつ。区画溝・SD-42は西辺と北辺・南辺の一部を検出した。西辺は長さ10.8m、最大幅1.45mを測るが、削平が著しく最大深度で23cmである。SD-46・39に西辺の大部分を壊されている。

方形区画幕 3 (第 8 図、図版10・11)

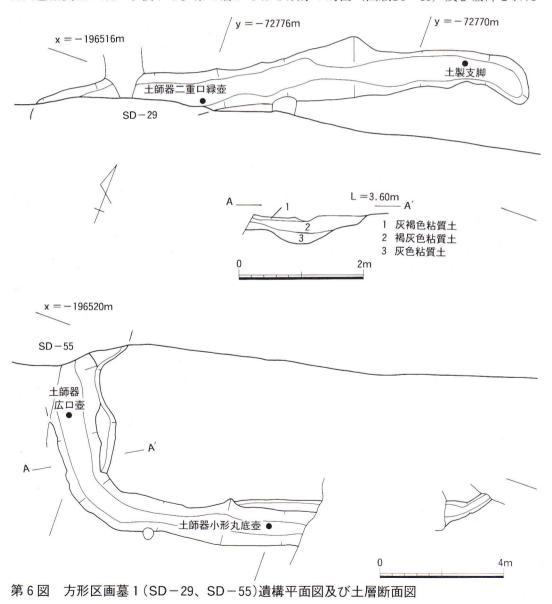
方形区画墓 3 は北西辺が7.75m、北東辺が6.8mを測る隅丸長方形の基底部をもつ。区画溝・SD-40は南西隅で浅くなり、途切れている。最大幅80cmで深さ約30cmを測るものである。

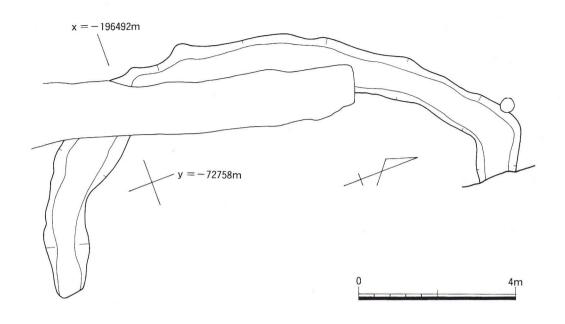
方形区画墓 4 (第 9 図、図版11・12)

方形区画墓4は北辺が8.30m、東辺が7.65mの隅丸長方形の基底部をもつ。区画溝・SD-32は最大幅85cm深さ35cm~20cmを測るものである。土層の堆積状況は暗灰褐色粘質土の単層である。溝は北西隅と北東隅がやや浅くなっている。北東隅で砥石(図版12・46)が出土した。

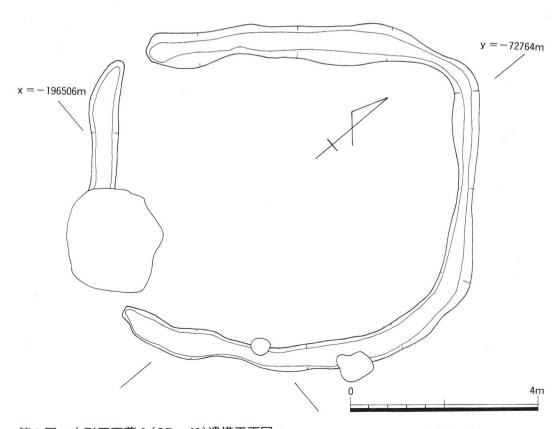
方形区画墓5 (第10・11図、図版13・14)

区画墓の北東部の隅であると思われる区画溝・SD-36を延長約6.0m検出した。区画溝の最大幅は2.35m深さ約50cmを測る。土層の堆積状況(第10図、図版13)は3層に分層することができた。上から、第1層・灰褐色粘質土、第2層・暗褐灰色粘質土、第3層・明灰色粘質土の順に堆積する。第1層からは1頭分の馬歯(図版14・46)及び破砕された





第7図 方形区画墓2(SD-42)遺構平面図



第8図 方形区画墓3(SD-40)遺構平面図

土師器甕(第22図4、図版29)が出土した。方形区画墓 1・SD-29を切る遺構である。出土遺物から、古墳時代中期のものであろう。

方形区画墓6 (図版14)

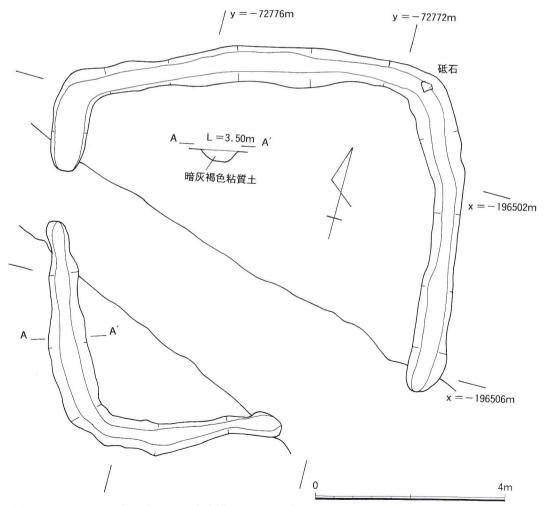
方形区画墓6の区画溝はⅢ区の北東隅に溝の南辺の西側半分、延長6.4mを検出した。 区画溝・SD-54は最大幅1.4mを測るが、削平の為非常に浅い。西端隅の部分は方形区画墓1・SD-55を切っている。1頭分の馬歯、完形の土師器高杯・直口壷などがほぼ底面に接して出土した。出土遺物から、古墳時代中期のものと考えられる。

SK-74 (図版15)

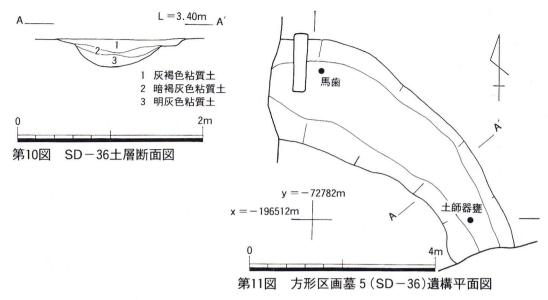
直径約1.55m深さ35cmを測る平面は円形で断面形逆台形。土層は灰黄色砂質土の単層で一部炭を混じえる。土壙墓の可能性がある。

SK-79 (図版15·16)

長径1.25m、短径約1m、深さ約50cmの平面形楕円形の土坑である。堆積土中に炭が 少量混入していた。土壙墓の可能性がある。



第9図 方形区画墓4(SD-32)遺構平面図及び土層断面図



SK-81 (図版16)

長径2.65m,短径約1m、深さ約30cmの規模を測る。北側に円形に深いところがあり、あるいは二つの遺構の重複かも知れない。この遺構も炭が少量ではあるが混入している。土壙墓の可能性がある。

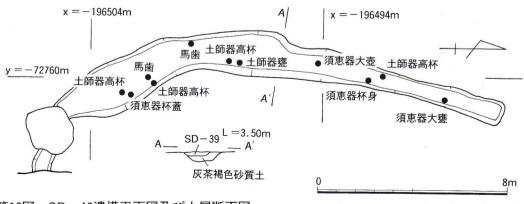
SD-46 (第12図、図版18・19)

II区の東側で検出された溝状遺構である。最大幅が2mを測り、北からほぼ南北方向に14.8m続き東に屈折する。土層の堆積状況は北端部はほぼ垂直な壁となり、水を流すためのものではなさそうである。溝からは多くの土器や2頭分の馬歯が出土した。土器類は、須恵器大甕(第23図18、図版33)・大壷(第24図29、図版33)・杯身・杯蓋、土師器甕・高杯などが出土した。古墳時代後期のものであるが、方形区画墓の区画溝の可能性がある。

(2) 奈良・平安時代の遺構

掘立柱建物(第13図、図版21)

II区では約100基のピットを検出したが、そのなかでP62・63・65・66・68~70は規格

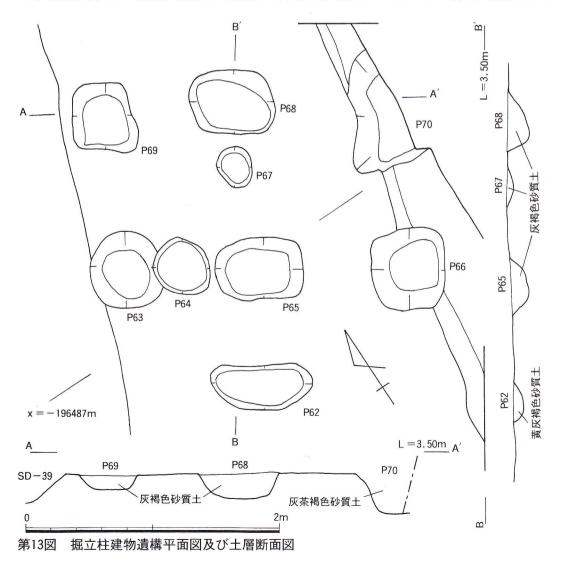


第12図 SD-46遺構平面図及び土層断面図

性をもち、方形のプランの掘方をもつため、他のピットとは区別される。これらのピット群は微高地上の一画に立地する。東はSD-27に切られており、西はSD-39と重複するため、明確なプランは検出出来なかった。現時点においては、約1.3mの間隔をもち2間×2間の規模の掘立柱建物であったとみられる。しかし、覆土は主に灰褐色砂質土であるが、P62には黄褐色砂質土が含まれており、検出面からの深さも8cmと浅い。他のピット群の深さも11~31cmとばらつきがあるものの、掘立柱建物に関係するものではない可能性がある。遺物は、P65・68~70から土師器片が微量出土しているが、細片で年代を決定するには困難である。SD-27・39との新旧関係によって考えた場合、鎌倉時代以前の、少なくとも平安時代の時期のなかで建てられたものと思われる。

SD-39 (第14·15図、図版22)

微高地上を南北に走向する長さ約25mの溝である。北端は調査区外であるため不明であり、南端は緩やかに底面が上昇して途切れてしまう。主軸はN-27°-Eの方向に掘削され、

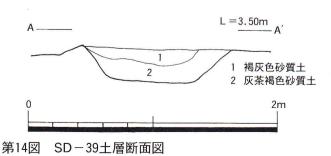


約1~2 mの幅をもち、深さは15cm~28cmである。断面は逆台形状を呈し、底面は若干の起伏はあるものの平滑で、標高が北端で3.24m、溝中央部では3.09mと南へと下がって行く。はじめ約20cmの厚みをもって、第2層・灰茶褐色砂質土が東肩から西へ傾斜をもって堆積し、次いでその上を第1層・褐灰色砂質土が覆っている。第1層は砂質が強く、甕・蓋杯・面取高杯・竈の他、手ずくね土器・瓦等が出土している(第26図)。第2層からは、壷・杯・高杯・竈・甑等の土師器が出土しているが、古墳時代の溝状遺構であるSD-46と、方形区画墓2の区画溝・SD-42とが重複しており、混入が著しい。そのため、明確な存続期間は不明であるが、第1層の遺物と第2層の新しい時期の遺物を考えあわせると、平安時代を下限とする時期のものと思われる。

(3)鎌倉時代の遺構

SD-20 (第16·17図、図版23·24)

II区の南部に検出されたN-65°-Wの方向性をもつ溝である。調査区内において延長約20mの規模を測り、両端は南壁と西壁にあたる。SD-29(方形区画墓1)、SD-32(方形区画墓4)、SD-19を切っており、II区調査外南側でSD-27とほぼ直交するものとみられる。東セクションで幅約3.0m、深さ約30cm、西セクションで幅約1.8m、深さ約35cmであり、西の方に向って狭く、深くなることがわかる。埋土は砂質の強い3つの層から成っており、鉄分により茶褐色に変色する。土層観察から少なくとも3回は洪水によるとみられる砂層堆積により埋没していったことが考えられる。それぞれの層に瓦器碗を含むことから、鎌倉時代に埋没したものと考えられる。第3層上面にヒトや小動物のものとみられる足跡を検出した。



x = -196582mx = -196590mx = -196598m8m

第15図 SD-39遺構平面図

SD-27 (第18図、図版25)

II区の東南隅に河道の西肩部を検出した。南 北方向の河道とおもわれ、N-12°-Eの方向性を もつ。SD-42(方形区画墓2)、掘立柱建物 (P66、P70)、SK-73、SK-74を切る遺構で ある。SD-20との切り合いは不明である。検 出最大幅約4.0m、同深さ約50cm、同長さ約25 mを測り、河底最深部は調査外にあるものとみ られる(写真7)。埋土は3層に分層されるが、 これもSD-20と同じく砂質である。瓦器を含 む。やはり洪水堆積により廃絶したものと考え られる。

石組井戸 (図版26・27)

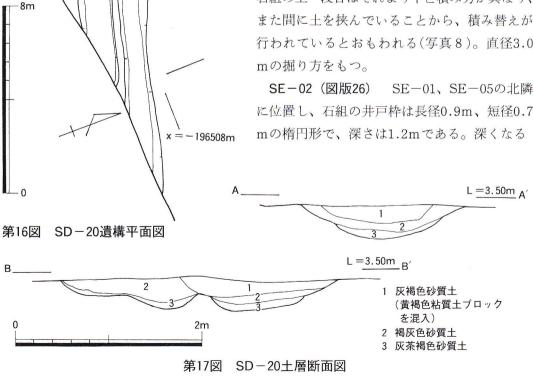
y = -72774

B'

III区において石組井戸が5基検出された。使 用石材は主として緑色片岩である。

SE-01 (図版26) III区の中央からやや北 よりに位置し、SE-05を切っている。内径1.0 m、深さ1.2mを測る緑色片岩の石組の井戸枠 の下に直径0.8m、深さ0.9mの桶を据えている。 石組の上一段目はそれより下と積み方が異なり、 また間に土を挟んでいることから、積み替えが 行われているとおもわれる(写真8)。直径3.0

に位置し、石組の井戸枠は長径0.9m、短径0.7



ほど内径は小さくなるが、石組の最下段で急激に狭まりテラス状になる。石組の下に木片が検出されており、下部に曲物枠があったものと考えられる。

SE-03 Ⅲ区南東隅に検出。緑色片岩の石組であり、調査地内には掘り方の一部と裏込め部分がはいるだけである。

SE-04 (図版27) 内径0.7m、深さ0.8mを測る石組の下部に曲物を二段据えており、 石組の底と中間にテラス状の石棚を2箇所有する。

SE-05(図版27) SE-01に切られている。石組は遺構検出面から約0.5mの深さまで削平されており、そこから1.0mの深さをもつ(写真9)。曲物による下部構造がある。

これらの井戸内の埋土から瓦器が出土しているので、 鎌倉時代には存在していたことがうかがえる。

(4) 江戸時代の遺構

河道氾濫原(第5図)

Ⅲ区南東部に位置し、Ⅲ区の面積の約7割をしめる。 埋土は暗灰褐色砂質土で底は鉄分により褐色に変色している。高低差などから北東から南西の方向に河が流れていたと考えられる。氾濫の時期は埋土中に肥前陶磁の染付が含まれていることから江戸時代と考えられる。

SD-52(第5図)

前述の河道氾濫原の上から切り込まれた溝状遺構であり、III区東部に位置し南北に延びる。幅約2m、深さ約15cm、途中2ヶ所撹乱されて途切れているが調査区内で33mの長さを有する(写真10)。埋土は灰褐色砂質土で、肥前陶磁の染付、寛永通宝が含まれることから、江戸時

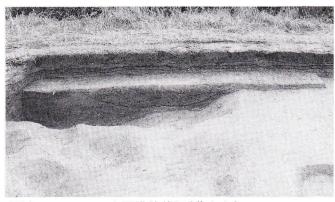
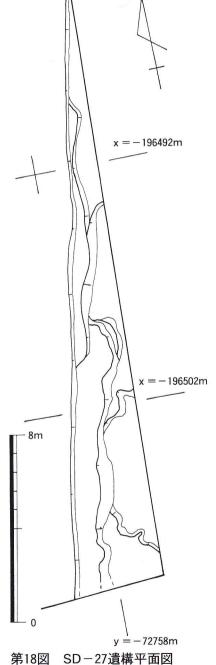


写真7 SD-27土層堆積状況(北から)



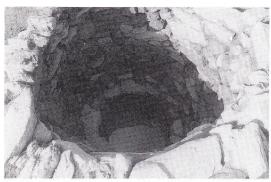


写真8 III区 SE-01石積状況(南から)

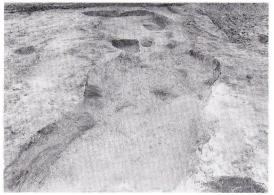


写真10 III区 SD-52(北から)



写真9 III区 SE-05石積状況(南から)

代中期のものと考えられる。

2. 微高地縁辺部の遺構

微高地縁辺部の遺構は、古墳時代前期と みられる水田区画(SX-11~SX-18)と、 それとセット関係にあると思われる溝・ SD-19、古墳時代後期のものでは、微高 地縁辺部の裾部を区画するとみられる溝・ SD-18、I区の北東隅で検出されたSD-12などがある。

水田区画(第19・20図、図版5・6・7)

水田区画はいわゆる小区画水田であり、微高地縁辺部を地形に沿って北東から南西に展開するものである。区画は8単位(SX-11~SX-18)あり、1単位は長辺4.0~6.15m、短辺1.75~2.30mの規模を測る、北東から南西に長い隅丸長方形のものである。水田区画は8単位の総延長が約48mの距離を測る。水田耕土とみられる埋土は灰黄褐色粘質土で深さ5~10cmである(第19図)。水田上面は削平を受けているが、埋土を掘削後の標高はSX-11が3.08m、SX-15が3.12m、SX-18が3.13mを測り、水田面はほぼ水平に安定していたことが推定できた。最も北側のSX-11埋土から弥生時代後期末とみられる甕の底部(第22図1)が出土している。水田区画の直上にはSD-17がこれを覆うように堆積しており、遺構埋土からは古墳時代前期の土師器が出土する。

SD-19 (第19·20図、図版17)

前述の水田区画と微高地の間に地形に沿って掘削されており、延長約50m、幅2.8m、の規模のものである。遺構埋土は黄灰色粘質土で深さ5~10cmを測る。埋土を掘削後の標高は北東端で3.28m、南西端で3.18mを測り、北東から南西へ緩やかな傾斜をもつ。水田区画との間は幅1.5~0.5mを測り、本来の盛土は失われているが畦畔にあたる部分であると考えられる。遺構埋土からは古墳時代前期の土師器が出土している。

SD-18 (第19·20図、図版17)

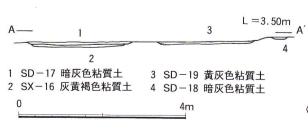
SD-18はSD-19と微高地裾部の間に地形に沿って北東から南東に掘削されており、延長約35m、幅約50cmの規模である。遺構埋土は暗灰色粘質土で深さ5~10cmを測る。埋土を掘削後の標高は北東端で3.38m、南西端で3.33mを測り、北東から南西へ緩やかな傾斜をもつ。6世紀後半の須恵器などが出土する。SD-18は和歌山県が昭和52年から同54年までおこなった鳴神地区遺跡の調査で、本調査地の北側に隣接するA地区で検出されたSD-005の延長部分であると考えられる。SD-005は本調査では微高地と呼んでいる自然堤防状地形の裾に沿って掘削されたものと考えられている。

SD-12 (第21図、図版20)

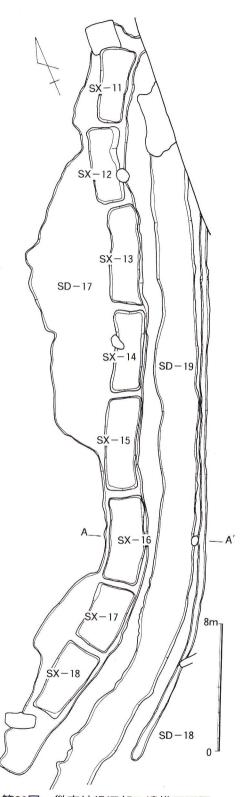
I区の北東隅で検出した溝である。北西から南東の方向性をもち、幅約3.4m、検出長10.8m、深さ約30cmの規模を測る。土層の堆積状況(第21図、図版20)は2層に分層することができ、上から第1層・暗灰褐色砂質土、第2層・灰褐色粘質土の順に堆積する。第1層から完形の須恵器杯身(第25図34)、第2層から須恵器杯身(第25図35)・円筒埴輪(第31図116・122・126)などが出土している。SD-12は先述の和歌山県の調査で検出されているA地区SD-024の延長部分に当たるものと思われる。

参考文献

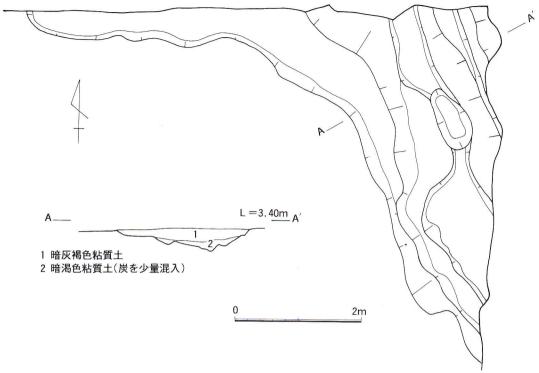
和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 1984年



第19図 微高地縁辺部の土層断面図



第20図 微高地縁辺部の遺構平面図



第21図 SD-12遺構平面図及び土層断面図

第5章 遺 物

遺物は全調査区でコンテナに約100箱出土した。量的にみた場合、遺物包含層である第4層からの土器類の出土が顕著である。その他、方形区画墓の溝から完形の土師器壷などが出土した。以下、遺物の主体を占める土器を遺構出土のものと包含層出土のものに分け記述を行うこととする。なお、埴輪・製塩土器・竈・フイゴ・紡錘車・土錘・耳環・管玉・石器・馬歯については、それぞれ別項目を設けた。

1. 遺構出土の土器

遺構からはSD-46や方形区画墓1などを中心に多くの保存状態が良好な土器類が出土 した。以下、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉時代の順に記述を行う。

(1) 古墳時代の土器

水田耕土(SX-11)出土土器(第22図)

1は弥生土器の甕底部である。底径は4.0cm、残存高2.3cmを測り平底を呈する。摩滅が著しく図化はできなかったが、外面は粗いタタキがみられ内面はナデで仕上げられている。色調は淡赤褐色を呈し、胎土は砂粒を多く含む。弥生時代後期末のものと考えられる。

方形周溝墓 1 (SD-29、SD-55) 出土土器 (第22図、図版29)

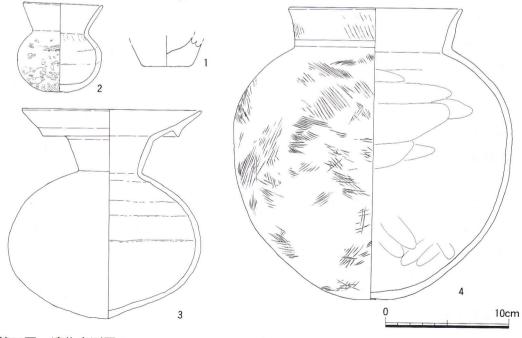
2は小型丸底壷で、ほぼ完形でSD-55から出土している。色調は淡灰褐色を呈し、胎土に石英、片岩を少量含む。口径8.5cm、胴径8.9cm、器高9.3cmを測り、口縁部は直線的に延びる。口縁部と体部の境目は緩やかで明瞭ではない。底部はやや厚く仕上げられている。外面の調整はヘラケズリの後にヘラミガキ、内面体部はヨコナデ、内面口縁部には細かなヘラミガキが施されている。

3は二重口縁壷である。口縁部は上半、下半ともに直線的であり、くびれ部より若干上方に断面三角形の垂下する段をもつ。底部は器壁が厚くやや尖っている。ほぼ完形である。色調は淡赤褐色を呈し、胎土に石英、長石、赤色粒、片岩などを含む。摩滅が著しく調整は観察できないが、体部外面に黒班がみられる。口径19.2cm、胴径20.5cm、器高21.9cmを測る。

以上のほかに高さ約11cmの土製支脚、外面タタキ整形の土師器甕底部、器高約30cmを 測る底部を穿孔した土師器広口壷が出土した。上述の小型丸底壷(2)や二重口縁壷(3)は庄 内式併行期の新しい段階に属するものと考えられる。

方形周溝墓5(SD-36)出土土器(第22図、図版29)

4は土師器甕である。色調は淡橙灰色を呈し、胎土に石英、長石、片岩などの砂粒を含む。口径18.4cm、胴径29.7cm、器口30.6cmを測り、緩やかに外反する口縁部は器高の約1/8の高さをもつ。調整は体部内面はヘラケズリ、口縁部内面はヨコナデによる。外面調整では、体部は不定方向のハケにより、口縁部はタテハケによる。また、口縁部と体部の接合部はナデにより調整されており、明瞭ではない。



第22図 遺物実測図1

SD-46出土土器 (第23·24図、図版32~35)

今回調査の遺構の中では最も遺物の出土量が多い。遺物はコンテナに約1箱出土し、土師器、須恵器、馬歯などが出土した。

土師器

杯(19)、高杯(20~25)、把手(26~28)、甕、甑、壷などが出土している。杯(19)は完形で出土しており、調整は内面、外面ともにヨコナデで仕上げられる。口径13.1cm、器高4.0cmを測る。高杯(21)はほぼ完形であった。全体に摩耗が強いため調整はわかりにくいが杯底部外面は中心から約1/2まで回転ヘラケズリの痕がうかがえる。口径15.0cm、脚部径12.7cm、器高15.8cmを測る。把手(28)は外側からの差し込みにより接合されているとおもわれる。接合部外面は粘土で補強されており、その調整は指によるナデケシである。26は先の尖った把手部分である。外側から貼り付けられたものであり、その接合部はハケにより調整されている。

須恵器

蓋杯(5~11) 杯身はTK43型式からTK217型式に併行すると思われるものが出土している。9は外面が中心より2/3まで回転ヘラケズリにより調整されており、そこから外側、及び内面にはヨコナデがほどこされている。たちあがり、受け部の形状よりTK43型式に併行するとおもわれる。陶邑においてこの型式ではたちあがりはオリコミ技法によるが、これはハリッケ技法によるものである。和歌山県教育委員会の鳴神地区遺跡の発掘調査時に類品がみられる。

杯蓋にはかえりの付いたものはみられず、杯身とほぼ同時期のものと考えてさしつかえないとおもわれる。外面の回転へラケズリはすべて中心より1/2以上行われている。

高杯(12~14) 長脚二段三方すかしの脚部(14)が確認される。蓋(12)は稜の部分に沈線をもち、偏平なつまみをもつ。外面は中心から1/2以上回転ヘラケズリがされている。

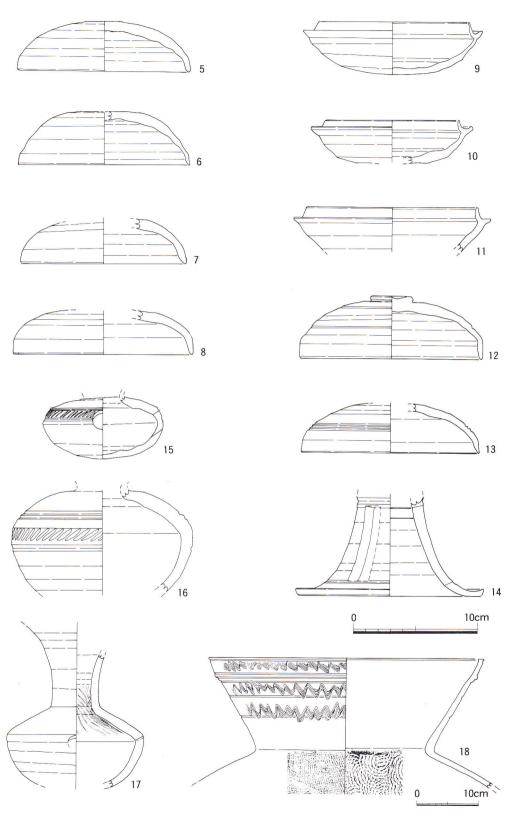
遠(15~17) 15は体部のみ残存しており、刺突文からなる文様帯をもつ。底部の調整は回転へラ削りの後に手持ちによるヘラ削りを行う。17は文様をもっておらず、体部に直径約1.0cmの円孔をもつ。底部調整は回転ヘラ削りによる。

壷(29)、甕(18) 18は口径44cmをはかり、その頸部外面には沈線により区切られた波状文による3本の文様帯をもつ。29は胴径43cmをはかる大型の壷で、外面は平行叩きが行われている。内面は全体に当て具による同心円文が残っており、それを切るかたちで内面底部に円弧叩きの痕がみられる。内面最終調整として一部、スリケシがほどこされている。

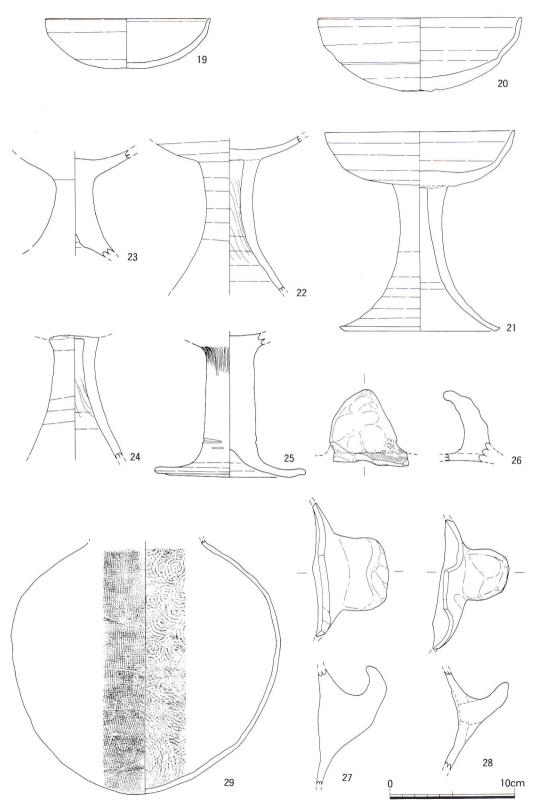
以上の遺物、とくに蓋杯から、これらはTK43からTK217型式に併行するものとおもわれ、遺物の時期を6世紀後半から7世紀前半にもとめることができる。

SD-12出土土器 (第25図、図版35)

須恵器杯身(34·35)、円筒埴輪(116·122·126)などが出土している。34は口径9.8cmと小形であり、短いたちあがりをもつ。TK209型式併行のものとおもわれる。外面調整は中



第23図 遺物実測図2



第24図 遺物実測図3

心より 2/3 以上回転へラケズリが行われている。35はその形状からTK43型式併行とおもわれる。回転へラケズリは中心より 1/2 のところまでである。

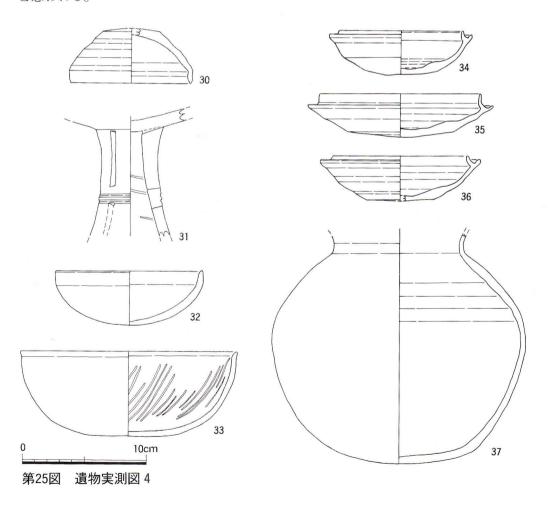
SK-73出土土器 (第25図、図版30)

37は胴径20.2cmの短頸壷である。軟質に焼成され、調整は不明瞭であるが、外面は回転ヘラケズリ、内面は不整方向のナデが観察できる。36は杯身で、底部はヘラ切りののち未調整である。TK209型式に併行するものと思われる。

SK-74出土土器(第25図、図版31)

土師器 32は杯で、内面全体及び外面口縁部にナデによる調整がみられる。口径 11.7cm、器高4.2cmを測る。33は口径17.4cm、器高6.7cmを測る鉢で、口縁部は少し外反する。摩滅がひどく調整はわかりにくいが、内面にヘラミガキの痕跡を観察できる。

須恵器 長脚二段三方すかしの脚部(31)が出土している。色調は表面が黒灰色であるが断面では薄紫色である。杯部内面は不定方向ナデにより調整がされている。蓋杯(30)は口径9.6cmと小型であり、口縁部はやや内湾する。天井部は回転へラ切りの後に回転へラケズリがなされているようであるが、きわめて雑な感じである。TK217型式に併行するものと思われる。



参考文献

桜井市教育委員会『纒向』 1976年

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年

中村浩『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981年

奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第49冊 1986年

(2) 奈良・平安時代の土器

SD-39出土土器 (第26図、図版36)

遺物はコンテナ約2箱分出土している。特に須恵器が多く、甕・杯($40\sim42$)・椀(44)などがある。その他、手づくね土器(51)・瓦(57、図版36a)などがある。

須恵器

電(38・39)は、外面に比べて内底面の調整が粗く、胎土中の礫が露出しており、内外面の色調も違うため、壷と思われる。38は、高台径6.9cmを測り、粘土貼り付けである。調整は内外面共にナデを施し、外面は灰色であるのに対し内底面は淡灰色であり、長石粒が露出している、39は、高台8.4cmを測る。38が軟質であるのに対し硬質であり、外面暗灰色、内面赤灰色を呈する。外面はナデを施し、内面は成形した後調整を行わず、表面に凹凸を残す。胎土中には長石・片岩・黒色粒を含む。

杯(40)は高台の底面を、ヘラ状工具によってナデ調整を行ったとみられ、工具先端によって付いたとみられる擦痕がある。そのため、高台が内傾して接地するのは、意図的なものではないと思われる。杯(41)は、底端部近くに高台が付き、外端面で接地する。杯(42)は、乳白色を呈し、軟質である。高台は、底端部よりやや内側につき、水平に接地する。

43は、平瓶の口縁部である。口径は7.5cmで、頸部からラッパ状に開き、口縁部がやや 内湾する。調整は回転ナデで、口縁部に一条の凹線が見られる。

把手(45)は、どの器種につくものかは不明であるが、「コ」の字形につく把手である。 乳白色を呈し、軟質である。把手は指おさえの後強いナデによって整形されており、雑な つくりであるが横方向を意識し、またわずかに残る器部の表面にタタキの痕が一部残って おり、タタキがナデ消されている側を上方に考えると、図のような方向につくとみられる。

その他須恵器としては、高杯もしくは円面硯の脚端部と見られる46がある。出土したのは本来の直径の1/10程である。比較的丁寧な調整でシャープであり、端部から上方へ立ち上がるまでに一条の突線がつく。円面硯の脚端部ではないかと推定される。

灰釉陶器

(47) は、灰釉皿の底部である。高台は貼り付けで、径7.8cmを測る。内面には灰釉が薄くかかるが、内底面中央部分に径約7.0cmの円形に露胎部分を残す。施釉部分との境に沈線を施しており、露胎部分は平滑である。色調は施釉部分で淡緑色を呈する。高台内底部に糸切り痕を残す。

十師器

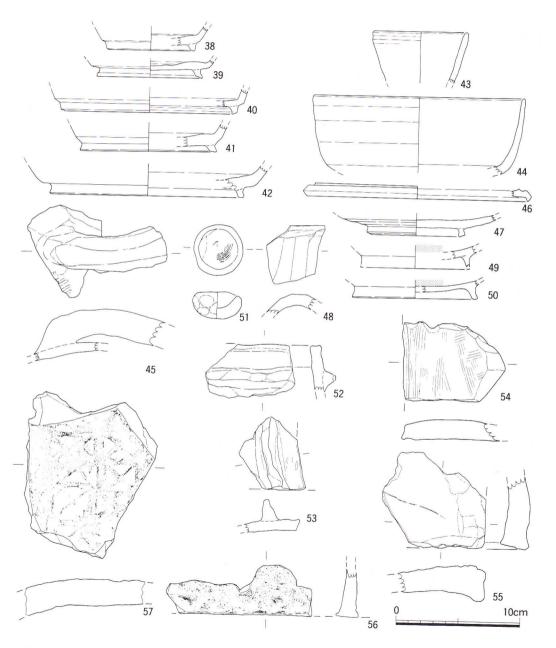
高杯(48)は、面取高杯の脚柱部である。本来の1/3程度しか残っていない。

黒色土器

49・50は、黒色土器の椀である。両者とも、内面に炭素を吸着させたA類である。内面のヘラミガキ調整等は、摩滅が著しく判別できないが、赤橙色のやや良好な胎土で、高台の器壁が薄い。

手づくね土器

51は口径3.8cm、器高2.1cmの椀形で、器壁が0.8cmと厚手である。主に内面は赤褐色



第26図 遺物実測図 5

で、外面は淡黄褐色を呈し、土師質焼成である。粘土塊に指を押しあて内面をつくり、外面はそれにあわせて成形したとみられる。外底面が赤色化しておらず、直接火を受けた形跡がないため、蓋杯につくつまみの可能性が考えられるが、外底面や口縁部に接合痕がみられない。和歌山県教育委員会の鳴神地区遺跡の調査時にも、古墳時代の手づくね土器が多数出土しているが、指頭圧痕が目立つ雑なつくりである。それに対してSD-39出土のものは、精緻な胎土で内外面共にナデを施し、丁寧なつくりをもつもので明らかに区別される。

齏

竈(52~56)は遺構からの一括出土であるが、胎土・器形がいくつかみられる。胎土の色調が灰赤褐色を示すものと(52~55)、淡橙褐色を呈するもの(56)があり、全てのものに長石・片岩・クサリ礫が含まれているが、やや堅緻に焼成されているもの(52~54*56)と、胎土が粗く表面の剝離が著しいもの(55)がある。52は断面台形状を呈するタガをもつ口縁部分である。タガは粘土紐貼り付けで、上面は水平に、下面は傾斜をつけてナデ調整されている。器面は内外面ともにヨコナデにより平滑である。口縁端部は外側にやや肥厚して面をもち、強いナデによって一条の凹線がみられる。また器面には、内外面ともに煤が吸着している。53*54は焚き口部分であり、55*56は底部である。53は付け庇で、竈に向かって左側面にあたり、54は右側にあたる。53*55*56の底部を比較してみると、53*56は比較的薄い粘土板を積み上げ、器壁の厚さを一定にしているのに対し、55は約2.0cmと厚く、底部を肥厚させて接地面を広く取っている。また、53*56は外面に上下方向のハケを施し、内面をヨコナデしているのに対し、55は外面にヘラ状工具によるナデを、内面をヨコナデしているものの、器面に凹凸がみられる。

瓦

方形の区画の中にX字のつく、変形格子タタキを凸面に施した平瓦片(57)が一点と、今回写真図版しか掲載していないが、丸瓦片(図版36a)が一点出土している。57は、厚さ約2 cmで赤褐色を呈し、軟質である。凹面には布目圧痕をもつ。製作技法から平安時代のものとみられ、昭和52年度の県教育委員会の調査時においても、B地区段構成土から出土している。丸瓦(図版36a)は淡黄褐色の胎土を呈し、軟質焼成で、表面が黒色化している。凸面で淡黄褐色の胎土が露出している部分は、瓦頭面との接続部分であったとみられる。

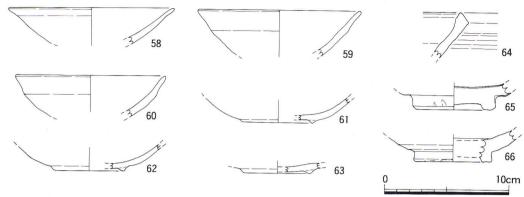
参考文献

奈良県立橿原考古学研究所『飛鳥京跡二』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第40冊 1980年 古代の土器研究会『古代の土器 I 都城の土器集成』 1992年 古代の土器研究会『古代の土器 II 都城の土器集成』 1993年

(3)鎌倉時代の土器

SD-20出土土器(第27図)

出土土器は土師器、須恵器など古墳時代のものの混入が多いが、瓦器椀(58~63)・皿、



第27図 遺物実測図6

土師器皿・羽釜、東播系須恵器こね鉢(64)、中国製青磁碗(65)・白磁などが出土している。 瓦器椀には完形復原できるものはないが、口縁部(58~60)と底部(61~63)を示す。口縁部のうち58は復原口径13.2cm、59は13.0cm、60は12.0cmを測る。いずれも口縁端部は強いヨコナデにより調整されている。磨滅の為暗文等は観察することができなかった。底部のうち61は復原底部径5.7cm、62は5.6cm、63は5.2cmを測る。すべて高台は断面形が三角形で低い。胎土は淡灰色を呈し砂粒をわずかに含むが緻密な土である。磨滅が著しい為暗文等の観察はできなかった。東播系須恵器こね鉢(64)は強いヨコナデにより仕上げられており、淡灰色であるが口縁端部は重ね焼きの為か黒灰色を呈す。破片が小さいが口径を復原するならば26.6cmを測る。中国製青磁碗(65)は底部径6.0cmを測る。釉はやや厚くかかり、一部高台内に流れ込むところもある。太宰府分類の竜泉窯系青磁碗 I 類に相当する。

SD-27出土土器 (第27図)

古墳時代の遺物が大半であるが、瓦器椀、中国製青磁碗(66)などが出土している。瓦器 椀は細片で図化することができなかったが、青磁碗(66)は復原高台径6.2cmを測る。施釉 は高台外側面までで、太宰府分類の竜泉窯系青磁碗 I 類にあたる。

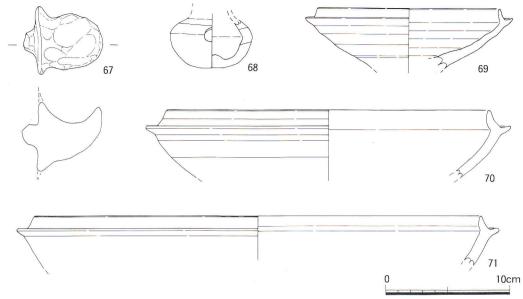
参考文献

横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』第4集 1978年)

2. 遺物包含層出土の土器

(1) 古墳時代の土器(第28図、図版37)

土師器



第28図 遺物実測図7

須恵器

69は有蓋高杯の体部である。口径は14.5cmを測り、外面の調整は中心より 2/3 のところまで回転へラケズリがされている。

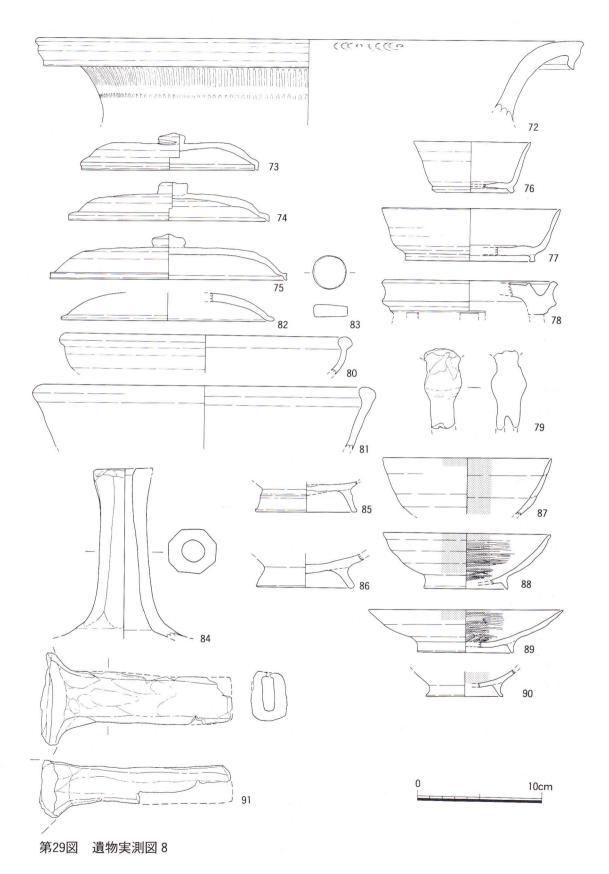
須恵器で特異なものとして軟質で大形の杯身(70・71)が数点出土している。口縁部の断面の形を見る限り、TK43型式に併行する蓋杯の杯身と似ているが、口径を復原すると70、71はそれぞれ約35.6cm、25.6cmとなり、一般的な杯身とは異なるようである。焼成は悪く軟質焼成であり、色調はどちらも淡い灰色を呈している。調整は内外面ともヨコナデによるが、70の外面下部には回転ヘラケズリの痕がうかがえる。

(2) 奈良・平安時代の土器 (第29図、図版38~40)

須恵器

甕(72)は、頸部から口縁部にかけて大きく外反し、肥厚させた口縁端部をやや内側に向かって垂下させる形態のものである。口縁端部外側面には、強いヨコナデによって二条の凹線がつく。外面は太い縦ハケを、内面はタタキを加えた後、両者ともナデを施している。調整等は違うものの、同形のものが百々遺跡(長岡京右京69次調査)SK6901で出土しており、9世紀中頃のものとみられる。

杯蓋(73~75)は、かえりが消失し、まだ天上部に膨らみがあるものである。全体的に調整が雑で、焼成も甘い。73は淡灰色を呈し、外面ヘラケズリの後軽いナデを行う。口縁端部はやや内傾し、若干肥厚する。つまみの側面には、回転調整時についたとみられる、ヘラ状工具による溝状の凹線がある。74・75は特に、天上部から端部にかけてのカーブは緩やかになり、一定の幅をもつ縁がつく。74の端部は丸く処理されているが、75は端部側



— 33 —

面に面をもち、ナデによる凹線が明瞭につく。

76・77は、高台のつく杯B類である。逆「ハ」の字形にゆるやかに開き、胴部下半がや やふくらむ器形で、高台は内端面に接地する。76は口径13.2cm、器高4.2cmあり、77は 口径9.3cm、器高4.0cmである。蓋杯は共に、平城宮VIに相当するものとみられる。

78は、円面硯上面の一部である。口径は13.6cmあり、口縁端部と陸部の高さにあまり 差がない。陸部を区画する突帯も低く、海部が浅い。胎土は長石粒を含み、やや焼成が軟質である。スカシを入れた時のヘラ切りの痕が2ヶ所でみられ、復原するとスカシ穴は7ヶ所あったと推定出来る。平城宮VIの範疇にあるものと考えられる。

79は、盤もしくは円面硯につく獣足とみられる。接地面は欠損しているが、器部との接続のために施された強いユビナデ痕がある。その接続部分からやや下に、こぶ状の膨らみがあり、その後は細くなって直線的に下方へのびる形態のものである。膨らみから下部は中空で、細いヘラ状工具によって開けられたと思われる。全体的にヨコ方向のユビナデによって調整された後、脚部と器部を接続し若干上下方向のユビナデを施している。

鉢(80・81)は、口縁部が玉状に肥厚するのが特徴である篠窯系の鉢である。80は、体部が逆「ハ」の字形に大きく開き、体部と口縁部の間を内湾気味に屈曲させ、その後再び口縁部が外方へ開く器形である。口縁部は両側に粘土を貼り付け肥厚させ、外面を強いナデによって口縁部を明瞭に作り出している。81は、外方に向かって真っ直ぐに開き、口縁部と体部の境目が明瞭でない器形のものである。色調が乳白色で焼成不良である。口縁部先端を折り込んで肥厚させている。80は10世紀前半、81は10世紀中葉のものと考えられる。

土師器

82・83は、須恵器の蓋杯の蓋を模倣した土師器である。82は、天上部が緩やかに下り丸 みのあるもので、端部は屈曲した後水平方向につく。全体をヨコナデ調整しており形状は 単純であるが、73~75と同時期のものを摸倣したとみられる。83はつまみの部分であり、 断面長方形を呈する。82・83は、赤褐色でやや緻密な胎土である。

高杯(84)は、断面八角形の高杯である。やや堅個に焼かれており、一側面に黒斑がみられる。脚柱部の面取りは観察の結果、まず四面を等間隔に削り断面四角形にし、その後角を取るように削りこみ、八面をつくっている。

椀(85·86)は高台部分しか残存していないが、高台から脚部へと屈曲して行く器壁の角度と内底面の丸みから、椀と考えられる。85は、ややふんばり形の高台をもち厚みがある。脚端部は肥厚し、水平に接地する。表面は摩滅が著しく、石英・片岩・赤色粒を含むやや粗い胎土である。86は内底面が平底で、高台は「ハ」の字形に開く。残存している部分は、赤橙色を示す。高台及び器面はヨコナデ調整を行い、特に高台の付け根外面には、ヘラ状工具による強いヨコナデ痕が凹線状に付く。

黒色土器

第4層・第5層出土の黒色土器は、A類が多数を占め、器種も判別できるものはほとん

どが椀である。欠損部が多く摩滅も著しいため、器形、調整等は部分的にしか判らないが、口縁部から見込にかけては水平に、見込部分については、平行にヘラミガキを行い、その後口縁部付近を一定の幅で一条の回転ナデを施している(87~90)。87は、約1.0cm程の幅で強いヨコナデがみられ、底部が欠損しているものの、丸みがあり深底の様相を示している。胎土は長石や片岩を含む、やや粗いものである。88は、口縁部から体部中程にかけて、強いヨコナデがみられる、89は、口径に比べると器高が低いのが特徴であり、90は小ぶりで器壁も薄い。

把手付鍋

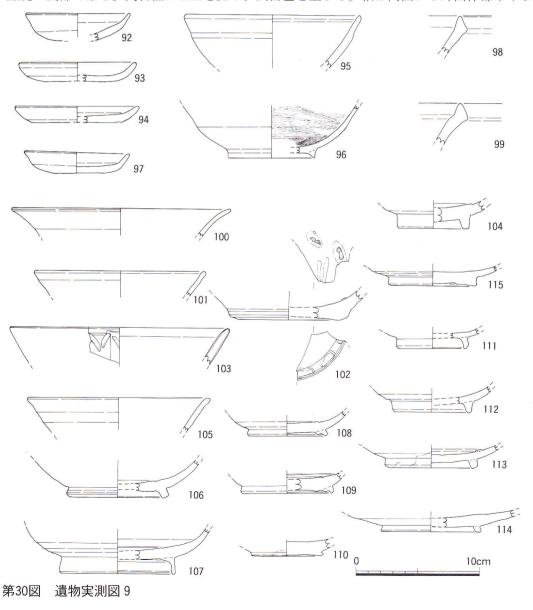
類例はあまりみられないが、91は火熨斗の器形をもつものである。把手部分と器壁がわずかに残存するのみであり、把手部は断面が長方形を呈し、付け根から端部まで13.2cmを測る。把手部と器部は、口縁部近くで接続しており、底部は破損しているため器高・器形は不明である。色調は内外面ともに黒色を呈し、硬質に焼かれている。外面が指ナデの後へラケズリによる調整が施されているが、凹凸があり雑なつくりである。また、板状工具によって把手の内部を空洞にしている。板に粘土を巻き付けて成形したか、もしくは使用時に板を差し込むためのものであると考えられる。和歌山県教育委員会による鳴神地区遺跡の調査時において、B地区段構成土から把手付鍋が出土しており、同形のものと考えられるが、B地区段構成土出土のものは、黒色土器であり黒色土器の製作技法で造られている。今回出土しているものは、黒色化しているものの土師器である。時期は、第4層出土の他の遺物の年代と、B地区段構成土出土のものとを考えあわせると、平安時代のものとみられる。

(3)鎌倉時代の土器(第30図、図版40)

遺物包含層第4層、及び第5層からは土師器皿(92~94)、瓦器椀(95・96)・皿(97)、土釜、東播系須恵器こね鉢(98・99)、瓦などが出土した。土師器皿は92・93が外底部を指おさえで、内・外側面はヨコナデ調整で仕上げるものである。92は口径8.3cm、高さ2.1cmを測り、淡褐色を呈す。93は口径9.3cm、高さ1.5cmを測り、茶褐色を呈するものである。94は口径9.9cm、高さ9.9cmを測り、淡褐灰色を呈し、底部に糸切り痕を残す。瓦器椀は、95が口径14.1cmを測り、口縁端部内面に沈線を施し、内面は密な平行線暗文、外面は何単位かの斜め方向のミガキが施される。96は口縁部を欠くが、口縁部から体部中位までヨコナデ調整がみられ、内側面は平行線暗文、内底部はジグザグ状暗文が施される。外底部は径7.0cmの断面形が三角形の高台が貼付けられる。外側面は磨滅が著しく暗文を観察することができなかった。97は瓦器皿である。口径8.4cm、器高2.2cmを測り、黒灰色を呈する。口縁部にやや歪みを生じるものである。東播形須恵器こね鉢は、98・99共に口縁端部に幅約1cmの面をもち、口縁端部を上方につまみあげるものである。口縁端面周辺は薄く釉がかかり、暗灰色を呈する。なお、図を示した土器はすべて第4層出土のものである。

(4) 輸入陶磁器(第30図、図版41)

輸入陶磁器は青磁(100~103)、白磁(104)などがある。すべて中国製のものであり、100~102は越州窯系青磁である。100は口縁部が外反する碗である。口径17.5cmを測り、緑灰色を呈する。越州窯系青磁碗 I - 2 類であり、輪状高台をもつものと思われる。101 も碗の口縁部である。口径13.6cmを測り、緑灰色を呈す。越州窯系青磁碗 I 類である。102は碗の底部である。底径9.2cmを測り、緑灰色を呈するものである。外底部接地面及び内底面に窯道具のものとみられる目跡を残す。越州窯系青磁碗 I 類であり、なかでも精製品に相当するものである。103は碗の口縁部であり、外側面に片切彫りで鎬蓮弁文を施している。口径17.6cmを測り、緑黄色に発色する。竜泉窯系青磁碗 I 類である。104は白磁碗の底部である。高台径5.4cmを測り、灰白色を呈する。釉は内面から外面体部下半ま



で施釉される。

参考文献

横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」(『九州歴史資料館研究論集』第4集 1978年)

(5) 緑釉陶器(第30図、図版41)

緑釉陶器は椀(105~109)、皿(110)、などがある。105は椀の口縁部で、口径14.6cm を測り、淡緑色を呈する。106から109は椀の底部である。106は削り出し高台で高台径8.2 cmを測り、暗緑色を呈する。全面施釉され、他と比べて特に硬質に焼成されている。107は高台径9.2cmを測り、濃緑色に発色するものである。全面施釉され、高台は細く高い。高台端部内側面に細い沈線がみられる。108と109は同タイプのものである。108は高台径6.4cmを測り、109は高台径7.4cmを測る。共に内底部には沈線をもち、高台は低い貼り付け三角形を呈する。釉は内面から高台部分まで施釉されるが、外底面は露胎である。近江地方のものと考えられる。110は皿の底部である。底径は5.8cmを測り、淡緑色を呈する。底部は平底で、露胎である。回転糸切り痕を残すものである。

(6) 灰釉陶器 (第30図、図版41)

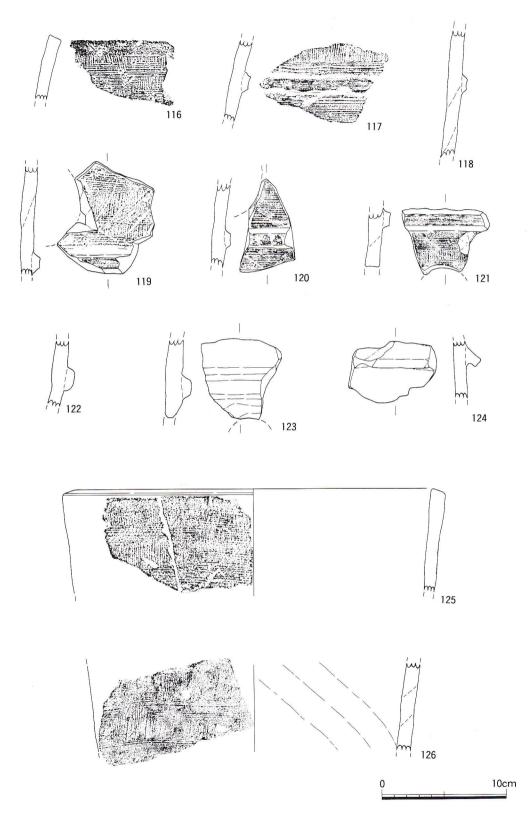
灰釉陶器は椀(111・112)、皿(113・114)、瓶などがある。111・112は椀の底部である。111は高台径5.7cmを測る。色調は淡灰色を呈し、内外面共に露胎である。112は高台径6.2cmを測り、内側面に灰釉が施釉される。内底面には重ね焼の痕跡がみられ、外面は露胎である。色調は施釉部が黄緑色、露胎部が灰白色を呈する。113・114は皿の底部である。113は高台径7.4cmを測る。内面から高台外側面まで灰釉が施釉され、内面底部には重ね焼痕がみられる。色調は施釉部が黄緑色、露胎部が灰白色を呈する。114は高台径が8.0cmを測り、全面に灰釉が薄く施釉され、淡緑色を呈する。灰釉陶器は椀、皿共に硬質に焼成され、高台は貼り付けである点が共通する。また、115は灰釉陶器ではなく須恵器であるが、灰釉陶器に器形が類似することからこの項でふれることとする。115は須恵器皿の底部である。高台はいわゆる蛇の目高台であり、径7.1cmを測る。色調は灰色を呈し、硬質に焼成されている。内面は使用のためか、平滑であり、重ね焼痕を観察できる。

3. 埴輪(第31図、図版42)

今回の調査で埴輪は約100片出土した。そのほとんどは遺物包含層からの細片での出土であり、遺構内の出土は $3点(116\cdot122\cdot126)$ である。出土の分布範囲はほぼI区内に限られており、その中でも東部に集中している(これに関しては第6章で後述する)。器種はほとんどが円筒埴輪であるが、若干の形象埴輪とみられるものもある。

円筒埴輪

116~121·125·126はその色調、焼成、調整、形状が共通することから、同じタイプのものであるとおもわれ、これらは全体の約9割をしめる。淡赤渇色の硬い土師質で、胎土には赤色粒を含んでいる。外面の調整はタテハケののちにC種ヨコハケをほどこしており、



第31図 遺物実測図10

内面はナデにより調整を行っている。器厚はほぼ一定で、 $9\sim11$ mmである。中央がくぼんだM字型のタガをもっており、その端面にはヨコハケがなされている $(117\sim121)$ 。また、口縁部の端面にもヨコハケが観察できる $(116\cdot125)$ 。川西編年では第 $\mathbb N$ 期に相当するものとおもわれる。

122 は黄灰色の土師質で胎土には赤色粒を多く含んでいる。外面はタテハケののちにョコハケをほどこしており、タガ下 1 cmは調整がナデ消されている。タガは丸くぼってりしている。

123も黄灰色の土師質であるが、摩滅がひどく調整は観察できない。タガは高く突出しており、その断面は台形を呈している。

形象埴輪

124 は土師質で淡橙灰色をしており、胎土に赤色粒を含む。摩滅がひどく調整は観察できないがその形状から家形埴輪の可能性が考えられる。

参考文献

川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64-2 1978)

4. 製塩土器 (第32図、図版39)

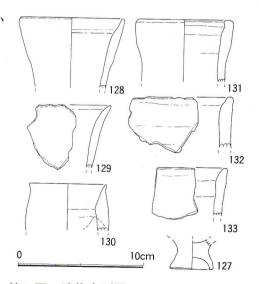
製塩土器の細片が多数出土している。そのほとんどは、口縁部の器壁が厚く、外に向かってわずかに開く器形のもので、広瀬和雄氏の編年によると丸底Ⅲ式に相当する。しかしその中でも、明確に脚台式と判別できるもの一点が出土している。全体的に直径約0.4cm内の長石・片岩・クサリ礫を多く含むのが特徴である。胎土の色調から、赤橙色(127・128)、淡黄褐色(129・131)、淡灰色(132・133)と三種類みることが出来る。130は、本来は淡灰色であったのが、二次焼成により赤変したものと思われる。127は、脚台Ⅳ式であるが、一般的に言われているものより、脚台内面のえぐりが大きく、指頭圧痕もナデ消されている。

底部には、火を受けた痕跡がある。128~133は、全て丸底IV式であるが、器壁の厚さがほぼ一定で、口縁部がラッパ状に開くもの(128・129)、わずかに口縁部がすぼまり、内面に傾斜のつくもの(130)、口縁部が直立ないし、緩やかなカーブをもって立ち上がるもの(131・132・133)があり、細部においては若干の差異が認められる。

参考文献

小賀直樹「製塩遺跡」(『和歌山の研究』地質/考古編 青文堂 1979年)

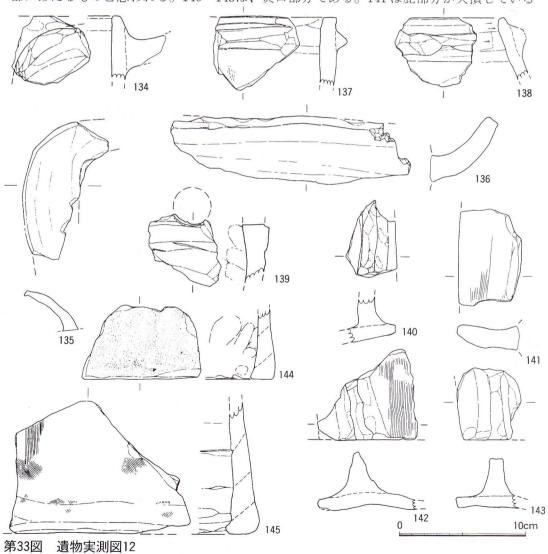
広瀬和雄「近畿地方における土器製塩-大阪湾周辺を 中心として-」(『考古学ジャーナル』第298号 1988年)



第32図 遺物実測図11

5. 竈(第33図、図版44)

第4層及び第5層から多量に竈が出土しており、第33図はその一部である。胎土及び調整によっていくつかの種類がみられる。出土状況については、第6章「遺物包含層出土の竈について」において後述することとする。134~136は、庇部分である。134・135は、竈に向かって正面から左側面へ屈曲して行く部分であり、136は正面部分にあたる。共に付け庇であるが、134は厚手で135・136は器壁が薄い。134は、上下方向のナデによって器面は平滑に調整されている。135・136は、淡赤褐色の胎土をもち軟質で、横方向のナデを施しているが、成形時の押圧が残っており凹凸がある。137・138は、タガのつく口縁部分である。137は断面三角形のタガをもち、138は偏平な台形状のタガがつく。137は口縁部を外側に肥厚させ、端部に面をもつ。138は、器面端部をそのまま終息させている。139は、空気孔がみられる器面の断片で、大阪府伏尾遺跡出土の竈にみられるように、おそらく後部にあたるものと思われる。140~143は、焚口部分である。141は庇部分が欠損している



が、それぞれ器面に、粘土板を貼り付けたものである。141・142は、器面外面には細かいタテハケを施し、内面はヨコナデによって平滑にし、硬質で丁寧なつくりである。144・145は底部であり、同じ太さの粘土板を積み上げて体部をつくっているが、最下段の底端部は肥厚させ、安定を計っている。これら竈の年代は不明であるが、庇が付け庇系であり、タガをもつのが特徴である。

参考文献

大津市教育委員会『滋賀里·穴太地区遺跡群発掘調査報告書II』 1982年

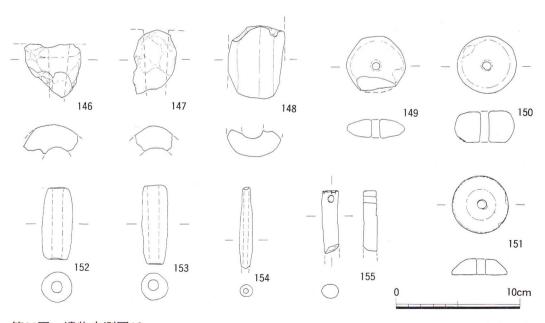
(財)大阪府埋蔵文化財協会『畠中遺跡発掘調査報告書』 1986年

埋蔵文化財研究会『古墳時代の竈を考える』第32回埋蔵文化財研究集会資料 (財)和歌山県文化財センター 1992年

6. フイゴ・紡錘車・土錘 (第34図、図版44・45)

フイゴは約10点出土しており、そのほとんどは遺物包含層からである。146・147はともに羽口の部分であり、第4層出土である。146の色調は乳灰色を呈し、先端は黒くガラス質化している。147の内面は橙褐色であり、外面は黒色に変色している。148はSD-12出土で、色調は橙灰色を呈し、外面はヘラケズリによる面取りが施される。復元直径は約4.5 cm、孔径約1.6cmを測る。

紡錘車は数点出土している。150は灰褐色の土師質で、直径4.5cm、厚さ2.4cmを測る。149はやや平たく、直径4.6cm、厚さ1.4cmである。土師質で色調は暗灰褐色をしている。このほかに滑石製のもの(151)もある。151は直径4.3cm、厚さ1.2cmの円錐台状であり、色調は暗緑色を呈する。



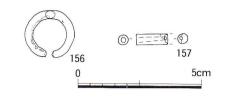
第34図 遺物実測図13

土錘は数点出土している。152~154は両端の細くなる円筒形で、棒状のものに粘土を巻き付けて制作されたとおもわれる。153にはヘラケズリの痕跡が見られる。155は棒状両孔式で断面は長径1.3cm、短径1.1cmの楕円を呈する。調整はヘラケズリによるとおもわれる。

7. 耳環、管玉、砥石(第35図、図版45・46)

156は I 区の第 4 層から出土した耳環である。 断面は長径3.5mmの楕円形を呈し、直径19.5mm を測る銅芯金張のものである。

II区の第6層からは碧玉製の管玉(157)が検出されている。薄い緑色を呈し、残存長13.0mm、直径4.0mmを測る。

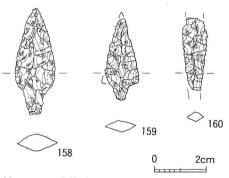


第35図 遺物実測図14

砥石(図版46)は方形区画墓4(SD-32)から出土した。長辺は破損を受けるが、残存長22.3cm、短辺18.4cm、厚さ8.4cmを測るものである。表面、裏面及び側面の1面を使用するものである。

8. 石器 (第36図、図版45)

石器は石鏃(158・159)が2点と石錐(160)が1 点出土した。3点共に石材は暗灰色を呈するサヌカイトを用いており、風化は受けていない。158は 凸基有茎式の打製石鏃であり、長さ4.2cm、幅1.6 cm、厚さ0.7cm、鏃身長2.9cmを測る。159も凸 基有茎式の打製石鏃であるが、158と比べやや小形 である。先端と基辺の一部を欠くが残存長3.3cm、 残存幅1.4cm、厚さ0.5cm、茎部長0.7cmを測る。 160は打製石錐で頭部と錐部先端を欠く。錐部の



第36図 遺物実測図15

残存長は2.8cm、幅1.0cm、厚さ0.5cmを測る。頭部と錐部の境は明瞭で、やや細くなるものである。以上の打製石器は弥生時代中期のものと考えられる。

9. 馬歯 (図版46)

馬歯は方形区画墓 5 (SD-36)、方形区画墓 6 (SD-54)、SD-46から出土した。方形区画墓 5 及び方形区画墓 6 からはそれぞれ馬 1 頭分の歯が、SD-46からは 2 頭分の歯が出土した。馬歯はいずれも臼歯の部分である。

参考文献

大阪市立自然史博物館『けものの歯』大阪市立自然史博物館ミニガイドNo.3 1986年

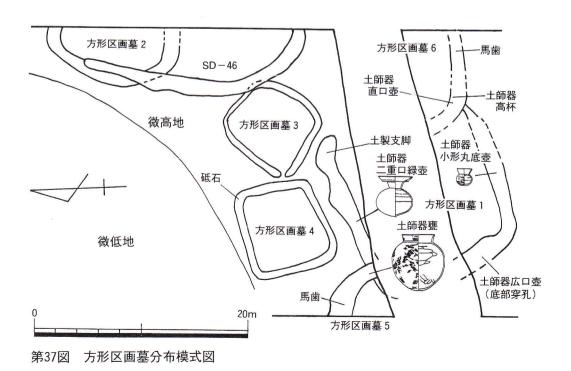
第6章 まとめ

1. 検出遺構からの考察

(1) 微高地上の方形区画墓について

本調査で検出した遺構では古墳時代のものが主体を占める。ここでは、そのなかでも特に微高地(自然堤防)上に立地する方形区画墓について取り上げる。方形区画墓(以後区画墓と略す)とした遺構は6単位検出しており、遺構の切り合いは区画墓1を区画墓5・6が切ることを確認した。出土した遺物などから考えて、各区画墓の時期は区画墓1出土土器が庄内式新段階(3世紀末~4世紀初頭)に属すること、区画墓2では須恵器が出土しないこと、区画墓3~6では須恵器が出土すること、区画墓5・6では馬歯(馬首)が出土すること、区画墓6では5世紀後半とみられる須恵器杯蓋が出土することなどから区画墓1・2⇒区画墓3~6の築造順位が考えられる。なお、埴輪はどの区画溝からも出土していない。

次に、区画溝からの遺物の出土状況をみると、区画墓1・5・6からは完形の土師器がそれぞれ出土している(第37図)。区画墓1の区画溝からは完形の土師器二重口縁壷・小形丸底壷・広口壷(底部穿孔)、土製支脚がそれぞれ単独に出土する。区画墓5の区画溝からは1頭分の馬歯と破砕された土師器甕が、区画墓6の区画溝からは1頭分の馬歯と完形の土師器直口壷・高杯、低石が出土した。それらに比べ、区画墓3・4は区画溝の四辺を検出したにも関わらずほとんど遺物を出土せず、わずかに区画墓4の区画溝で砥石が1点出土したにすぎない。区画墓2は削平が著しく判断できなかった。



— 43 **—**

以上のことから、古墳時代前期の区画墓1では、区画溝底に散在的に供献土器をそなえているが、古墳時代中期では区画溝底に供献土器や馬歯(馬首)をそなえる区画墓5・6とほとんど遺物を出土しない区画墓3・4の2群に分けることができる。このことは、区画溝の規模と深く関わることと考えられ、区画溝の規模及び平面プランの大きい区画墓5・6と小規模な区画墓3・4に対応するものと考えられる。ここに、方形区画墓の同一墓域内での格差をみることができる。

確認される方形区画墓は、古墳時代中期までであり、古墳時代後期では、土壙墓とみられる土坑(SK-74・79・81)3基が検出されており、その他多くの土器を出土した方形区画墓の区画溝の可能性のあるSD-46がある(第37図)。SD-46は土師器や須恵器の他2頭分の馬歯を出土したことなどから考えて、もし区画墓であるとするならば、古墳時代中期の区画墓の祭祀を同後期まで継続させたものと考えられる。また、上層遺物包含層である第4層から5世紀中頃の円筒埴輪片が多量に検出されたことから、本調査区外の旧微高地上にこれらの埴輪を立て並べた古墳の存在した可能性がある。

ところで、和歌山平野において当該時期の方形区画墓が検出されているのは、本遺跡の西側にある秋月遺跡と本遺跡の2遺跡である。秋月遺跡では4世紀代の前方後円形の周溝墓(SX-01)が5世紀代の方墳(方形区画墓)3基とともに確認されている。本遺跡でも和歌山県教育委員会の鳴神地区遺跡調査時に直径約6mの4世紀代の円形周溝墓(SX-280)が1基確認されている。本調査検出の方形区画墓群との直線距離は約300mであるが、地形的なことを考えるならば別の墓域であろう。さらに、鳴神V遺跡から西に約500mの距離にある花山古墳群の古墳築造開始期が4世紀末~5世紀初頭頃からであることを考え合わせるならば、それに先行する墓域をもつ鳴神V遺跡は秋月遺跡とあわせ、和歌山平野のなかにあっては、古墳時代の墓制を考える上で非常に重要な遺跡であるといえる。

参考文献

和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 1984年 奈良県立橿原考古学研究所『矢部遺跡』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第49冊 1986年 埋蔵文化財研究会『定型化する古墳以前の墓制』 1988年

(2) 微高地縁辺部の水田区画について

微高地縁辺部において、古墳時代前期のものとみられる水田区画を検出した。規模等の詳細は先に述べたが、水田関連遺構の摸式図を示す(第38図)。水田区画と微高地との間に掘削された用水路は北東方向から水を引くが、和歌山県教育委員会の鳴神地区遺跡の調査で検出されている古墳時代前期(庄内式~布留式並行期)の潅漑用水路(鳴神 V 遺跡内の下・H地区SD−097、I・J地区のSD−204、J地区のSD−258)から分水していることは明らかであり、J地区SD−258には水量調節のための堰が設けられていたことが確認されている。おそらくは、これらの大規模な潅漑用水路の本流は本調査地外の東部を流れていたものと思われる。

本調査検出の水田区画はプラント・オパール分析の結果、耕土とみられる土壌からイネのプラント・オパールが検出されたが、同時にヨシ属がほとんどみられないことなども明らかとなった。このことは湿地ではなかったことを示すものとみられる。また、花粉分析の結果では水田雑草などの花粉が微量検出され、量的にみてほとんどの花粉が分解されていたことが明らかとなった。以上のことから、検出した水田区画が湿田ではなかったことの可能性を示すものであり、その立地とあわせて微高地縁辺部といった水の管理の比較的容易な場所での乾田あるいは半乾田を営んでいた可能性が考えられる。

参考文献

和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 1984年

農耕文化研究振興会『水田遺構集成』 1988年 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 1989年

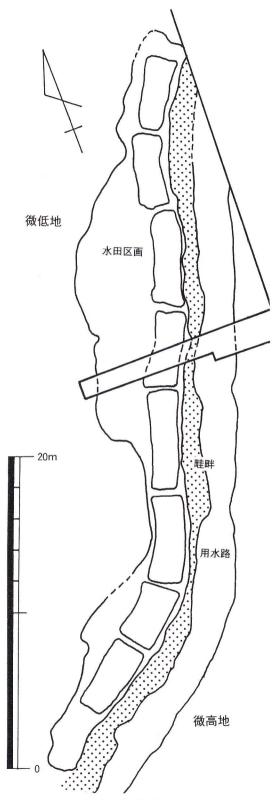
工楽善通『水田の考古学』東京大学出版会 1991年

2. 遺物包含層出土遺物の検討

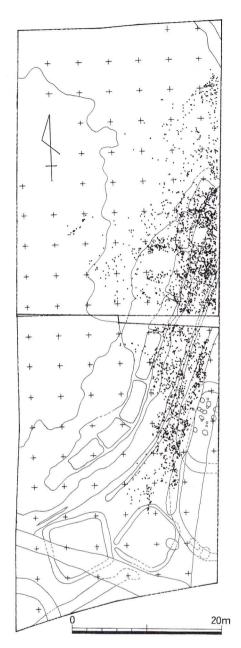
(1) 第4層出土玉石の分布について

遺物包含層を人力により掘り下げていたところ、第4層内に玉石が多く出土する箇所があることが判明した。層位的には4層の下半分厚さ5 \sim 10cmの間に分布しており、平面的にはI区の東側にみられる。以下、この玉石の分布の分析を行いたいとおもう。

玉石は直径2cmから15cmの丸い砂岩であるが、片岩なども少数ではあるが分布している。玉石が密集しているところは粗砂が大量に混ざっており、遺物も多く含まれるようである。そして、この玉石の分布範囲であるが、I区の南東部に集中し、そこか



第38図 水田関連遺構模式図

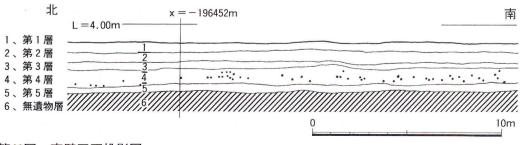


第39図 玉石分布図

ら離れるにしたがい、その含有量は緩やかに減少 していくものとおもわれる。

玉石及び片岩の分布状況を記録するために以下 の装置を使用した。現場での座標測量には測機舎 の光波計SET5Sと遺跡調査凡用システム「カタ タ|をカシオポケットコンピュータ-DT-7000 で用い、編集にはNECのPC9801で行い、データ のプロットアウトにはローランドのDPX-3600 を用いた。対象とする玉石は直径2cm以上の砂岩 及び片岩などで、データとしてはそれぞれの玉石 につきその種類(砂岩、片岩など)、最大径、位置 (平面座標、高さ)を入力した。その結果、調査範 囲内で記録した玉石は約3000個であり、その約8 割は砂岩であった。また、I区・II区で第39図の様 な分布状況であることがわかった。すなわち、I区 の南東部からII区の中央部にかけて帯状の分布を 示すが、I区の南東部において密度が最も高い。 また土層図と対応させてみると第40図のようにな り、ほぼ水平ではあるが、北にやや傾斜が低くなる。

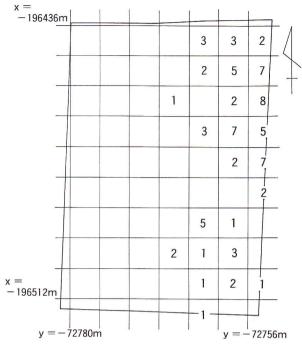
この分布状況を次の2点から考察してみた。まず、調査で復原した旧地形と照らし合わせてみると、この分布範囲は微高地及びその縁辺部に相当するとおもわれる。II区の微高地でSD-39及びSD-46の東肩から東部には玉石がないが、この部分には遺物包含層自体も存在していなかった。次に第4層・第5層で出土した遺物との関係を考えてみる。それぞれ4m×4mで取り上げているが、注目すべきは埴輪の出土状況である。埴輪は遺物包含層から約90点出土しているが、その分布はI



第40図 東壁玉石投影図

区において第41図にあるように東半分に限られており、これは玉石の分布する範囲とほぼ一致する。また埴輪と同じく古墳に関係する遺物として銅芯金張の耳環が1点この範囲内から出土している。

以上のことからこれらの玉石は第5 層の堆積後整地土のなかに含まれ、I 区の南東、あるいはII区の北東から微 低地の方向に薄く広げられたものと考 えられる。第4層に瓦器を含むことか ら整地時期は鎌倉時代とすることがで きる。また、埴輪と分布が一致し、耳 環などが含まれていたことから、微高 地上に存在した古墳との関係も考える 必要がある。

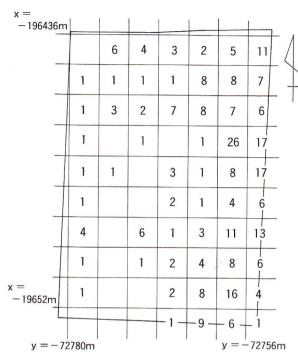


第41図 I区 埴輪分布図(数字は破片数)

(2) 遺物包含層出土の竈について

今回の調査では、遺物の出土状況から当調査区の性格及び立地を把握するものとして、遺物包含層の遺物の取り上げを 4 m×4 mメッシュ毎に行った。その中でも特に、須恵器・土師器等の日用雑器類に次いで出土量の多い竈に注目し、その分布状況から鳴神 V 遺跡の歴史的景観の復原を試みた。

竈についての報告は、遺溝及び遺物包含層出土の遺物の各章において行っているが、胎土及び調整等によっていくつかの種類が見られ、それが年代差によるものなのか製作地の違いによるものなのかは不明である。遺物包含層中には6世紀後半から8世紀にかけての須恵器・土師器の食器類が顕著に見られるため、おそらく竈も同時期のものであると考えられる。置竈の出土は、和歌山県周辺地域においても6世紀代に顕著であり、前回の和歌山県教育委員会による鳴神 V 遺跡の調査においても6世紀末から7世紀代とみられる竈が出土しており、今回出土したものも少なくとも、6世紀後半より遡ることはないと思われる。また今回の調査では、微高地上に方形区画墓併せて6基を検出しており、墓域の性格



第42図 I区 竃分布図(数字は破片数)

が強いが、電は平均して口径20cm強・ 底径30cm前後の規模をもち、内面に煤 が吸着していることから実用されていた ことは間違いないとみている。

従って、微高地では古墳時代前期から 中期にかけては方形区画墓が営まれ、墓 域として機能していたが、後期になって 周辺地域に集落が展開していったと考え られる。そしてその後平安時代から鎌倉 時代にかけて、微高地上を削平し微低地 を埋め立て、数次にわたって整地・開墾 が繰り返されて第4層及び第5層が形成 されたものと思われる。

参考文献

大津市教育委員会『滋賀里·穴太地区遺跡群発 掘調査報告書II』 1982年

(財)大阪府埋蔵文化財協会『畠中遺跡発掘調査 報告書』 1986年

埋蔵文化財研究会『古墳時代の竈を考える』 第32回 埋蔵文化財研究集会資料

(財)和歌山県文化財センター 1992年

3. 自然科学の調査

(1)鳴神V遺跡の地形環境

和歌山市立博物館 額田 雅裕

和歌山市の東部に位置する鳴神V遺跡は、古墳時代〜鎌倉時代の複合遺跡で、紀ノ川左岸の沖積平野に立地する。今回検出した主な遺構としては、古墳時代前期の水田跡、同後期の区画溝、同前期から中期の方形区画墓群、同後期の土壙墓などがある。

遺跡の地形環境では、現在の地形が必ずしも立地当時の地形と同じではないことを認識しなければならない。特に沖積平野の場合は、遺跡の成立時期が完新世(沖積世)後期の平野の形成時期とかさなるため、平野の発達過程と遺跡の立地とを対応させて考えることが重要である。そこで、最初に和歌山平野の発達過程を知るため、平野を構成する沖積層の堆積構造をみてみよう。

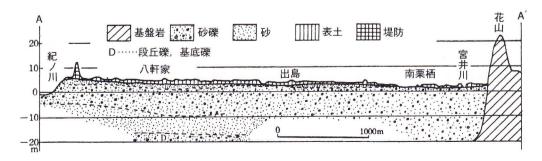
日本の沖積平野では、一般に沖積層が下位から順に基底礫層(BG)・下部砂層(LS)・中部泥層(MM)・上部砂層(US)・沖積陸成層(T)の5層に区分される¹⁾。BGは、更新世(洪積世)末期のウルム氷期の低位海水準に対応して形成された低位段丘礫層・扇状地礫層で、N値(地質資料の標準貫入試験の打撃回数)が50以上と固く締まった礫層であるので、他の地層とは容易に識別される。

第43図は、和歌山市の八軒家から花山にかけての紀ノ川左岸の地質断面図である。それをみると、表層を除いて砂礫が厚く堆積していることがわかる。そのうち、BGは、八軒家では深度17~19m以下に、秋月では深度18m以下に堆積している。

沖積平野の河口部では、深度7~10m以下に層厚10m前後と厚いシルト・粘土層(MM)が堆積していることが多い。同層は、縄文前期の海進時に堆積した三角州底置層と考えられる。和歌山平野において、それに相当する地層は、紀ノ川右岸の木本~北島には約5mとやや厚く堆積するが、秋月付近では礫層上に2m前後の青色粘土層がみられるにすぎない。第43図の八軒家~花山ではシルト・粘土層がまったくみられず、砂礫層だけからなる。このことは、その付近の紀ノ川左岸が完新世後期に紀ノ川の乱流帯(氾濫原)にあたり、扇状地性の激しい浸食や堆積があったことを示すと思われる。

第43図の紀ノ川側では、砂礫層と深度5~10m以下の砂層とが区分できる。この砂層は縄文海進後に三角州前置層として堆積したUSと思われるが、花山側では両層が渾然一体となって区別できない。その原因は、紀ノ川が急流で和泉山脈から多量の砂礫が供給され、紀ノ川が海岸砂州によって湾口を閉じられた内湾からラグーンに注ぐデルタファン的な堆積環境にその付近が位置したので、砂礫が十分にふるい分けられなかったためと思われる。

次に、現在の地表面の地形をみてみよう。第44図は、1万分の1空中写真(1961年撮影)の判読によって作成した、紀ノ川左岸における和歌山市東部鳴神付近の地形分類図である。鳴神 V 遺跡の位置は、第44図の®にあたるが、それをみると、同遺跡は完新世段丘(沖積段丘)II 面に位



第43回 紀ノ川左岸の地質断面図(日下, 19802)を一部修正)

置することがわかる。完新世段丘とは、縄文海進など完新世の高海水準に対応して形成された地形面をさし、低い段丘崖をもつが完全に離水した段丘面ではない。すなわち、大洪水時には、同面の一部が紀ノ川の氾濫を受けることもあり得ると考えられるのである。完新世段丘I面は、岩橋山塊の北麓や和泉山脈の南麓に分布し、第44図の図幅内にはみられない。

平成3年度にトレンチ観察を行った鳴神V遺跡(第44図のOの)は、紀ノ川の沖積平野の後背低地(氾濫原)を中心に分布し、鳴神V遺跡よりかなり粗い砂礫質堆積物がひろくみられた。一部にはポイント・バー(蛇行洲)的な流路内堆積が観察され、鳴神V遺跡は河道に近い所に位置したと思われる。同遺跡の南側には低い段丘崖があり、鳴神V遺跡が立地する完新世段丘II面へ連続する。そこで、次にこの段丘崖がいつごろ形成されたかが問題となろう。

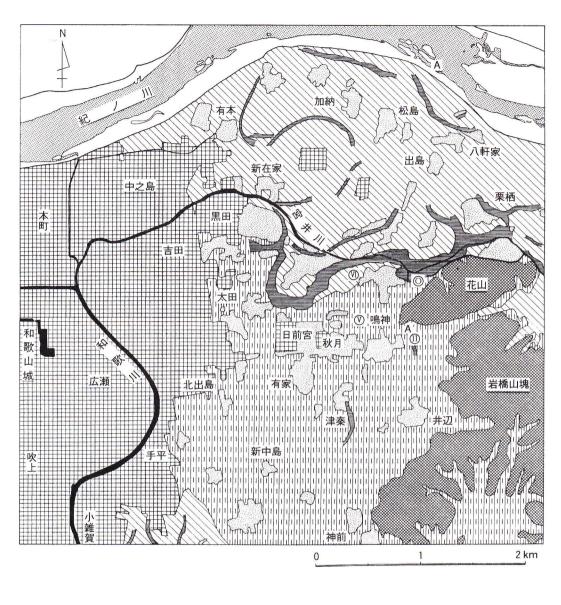
日下雅義氏によると、宮井川は太田城水攻めごろには紀ノ川の本流または有力な支流であったという $^{\circ}$ 。しかし、それがいつ頃から流れていたかは明らかにされていない。段丘化の時期を推定することができる資料としては、永暦 $^{\circ}$ 2年(1161)の「紀伊国在庁官人等陳状案」 $^{\circ}$ がある。それは、綾井(当時の宮井と推定される)が前年の洪水によって取水口が押し流されて、河川から用水が取水できなくなったため、それより上流に堰口を設けたという内容である。これによって、その付近には平安末期頃に1000町歩以上の耕地を潤す用水が取水できる河川のあったことがわかる。完新世段丘II面は、洪水時の浸食作用により河道が下刻されて水位が低下したため、段丘化したと考えられる。その時期は中世初頭と推定される $^{\circ}$ 。鳴神 $^{\circ}$ 3 鳴神 $^{\circ}$ 2 遺跡と鳴神 $^{\circ}$ 7 遺跡の間の段丘崖は、そのとき形成されたものであろう。音浦分水工から鳴神東の集落北側にかけての段丘崖は、最大3 m以上に達する。

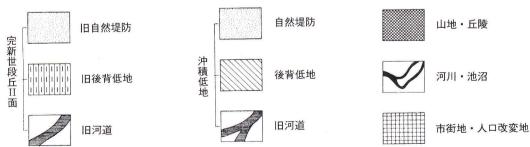
宮井は、全長約14km、灌漑面積約1400haと、右岸の六箇井と並ぶ和歌山平野の二大用水路である。六箇井の開発は近世であるが、宮井は日前宮付近の平野を潤すため古代に開削されたと考えられる。古文書によると、宮井の取水口は、洪水時の浸食によって次第に上流部へ移動していったことがわかる。最初は音浦にあり、和佐井ノ口から上三竜ノ鼻へ三遷したというが。それは、洪水のたびに河床が低下したため、取水口を上流に求めていかなければ取水できなかったことを物語っている。そのため、永暦2年に国司と大伝法院(根来寺)領山崎荘との間で争論が発生したが。現在の宮井は、岩出統合井堰から取水し、和佐・岩橋・栗栖を流下し、音浦分水工で北溝・中溝・新溝に分水されている。小倉・和佐付近の宮井用水路は、紀ノ川の旧河道を固定・利用したものである。

宮井の灌漑地域は、国衙領の中心にあたり、条里型土地割が広く分布する。その条里型土地割を1万分の1空中写真(1961年撮影)から抽出すると、宮井川の南側を中心に分布し、その北側にはほとんどみられない。条里型土地割の分布と地形との対応でみると、完新世段丘II面には密に残存するが、紀ノ川の氾濫する沖積低地には分布しないのである。中野榮治氏によると、その付近は河南条里区の日前宮小条里区にあたり、阡陌線が $N10^\circ$ Wの条里型土地割が435町歩分布し、紀伊国で最大規模であるという $^{\,\eta}$ 。

宮井の中溝用水路にそって、音浦から津秦にかけては条里型土地割の乱れがある。これは、条里型土地割施行後、河川の氾濫があったことを示すと思われる。鳴神 V 遺跡の発掘区域では、南東部が旧自然堤防、北西部が旧後背低地であったが、最南東端には鎌倉時代の旧河道の一部が検出された。それは中世前期の洪水堆積物で埋積された旧河道であることから、遺跡付近は段丘化の過程で多少洪水を受けた可能性がある。

鳴神▼遺跡の遺構は、方形区画墓群や土壙墓が旧自然堤防に、水田8面が旧自然堤防縁辺部に





A-A'は第43図の断面の位置、⑪は鳴神 II 遺跡、Vは鳴神 V 遺跡、Wは鳴神 V 遺跡、Wは鳴神 V 遺跡、Wは鳴神 V 遺跡、V

第44図 和歌山市東部 の地形分類図

沿って一列に分布する。古墳時代から中世前期までは、基本的な地形の配置パターンに変化はなかったと考えられるが、鎌倉時代後期から室町時代初頭には用水路が完全に埋没し、その後この付近は水田に再開発されたと考えられる。また、発掘区域では、中世以降の地層が約60cmと薄く、堆積量の少ない環境に変わったことがわかる。

鳴神 V 遺跡の地形環境は、このように古墳時代以降では中世の中頃に大きな変化があったが、 それは中世初頭におきた完新世段丘II 面の段丘化が大きく影響すると考えられる。

最後に、和歌山平野において、その他に用水路跡が検出された遺跡をみてみよう。鳴神V遺跡の他には鳴神II遺跡・音浦遺跡が知られるが、3遺跡は偶然にもすぐ隣接する。

鳴神 II 遺跡は、鳴神集落と鳴神団地の間の完新世段丘II 面に位置する(第44図の⑩)。同遺跡は、阪和自動車道建設に伴い1969~1970年に発掘調査が行なわれ、大溝などが検出された。大溝は、弥生時代末期に開削され、古墳時代初期から数回の改修をへて、平安時代まで使用された用水路と考えられる。古墳時代の大溝は幅 7~8 m・深さ3 mで、遺跡のB地区からは井堰が検出された。そこの花粉分析ではイネ科花粉が検出され、古墳中期には用水を整備して大規模な水田開発が行なわれたと推定される 8 。この大溝と平行して、現在の宮井の新溝用水路がある。発掘で検出されたものは、その前身で、平安時代まで使用されたが、何らかの原因で放棄され、現在の新溝用水路に変更されたと考えられる。

音浦遺跡は、阪和自動車道すぐ西下にある音浦分水工を含む範囲で、完新世段丘II面に位置する(第44図の \odot)が、北側は直接沖積低地の旧河道に面する。1971年発掘時の溝2と1978年発掘時のSD117は同一のものと考えられ、溝は幅約2m、深さ50cmである \circ 0。そこでは、現在の宮井用水路の南東側にそれと平行する溝が検出された。この溝は、かつての宮井用水路と考えられ、花山の北麓をめぐり日前宮付近へ達していたと思われる。その用水路がいつまで機能したかは明確でない。しかし、用水路は完新世段丘II面の段丘化によって現在の音浦分水工の方へ付け替えられ、宮井川(大門川)へ落す樋を閉めてダムアップすることによってようやく完新世段丘II面へ揚水することができることから、その段丘化の時期頃と考えるのが妥当であろう。

このように、鳴神II遺跡と音浦遺跡では、現在の宮井と平行する旧用水路が検出された。鳴神 V遺跡の用水路が埋積される時期、鳴神II遺跡の用水路が廃棄され現在の新溝用水路に付け替え られる時期と、古文書から推定される完新世段丘II面の段丘化の時期は整合することから、完新 世段丘II面の段丘化によって鳴神付近の地形環境が変化し、灌漑システムや土地利用に大きな影響を与えたことは明らかである。

注

- 1) 井関弘太郎『沖積平野』東京大学出版会, 1984。 なお、沖積層は、本来BGより上位の地層をさすが、ここではBGを含めて沖積層の説明を行う。
- 2) 日下雅義「紀ノ川の河道と海岸線の変化」『歴史時代の地形環境』古今書院, 1980, 131~174頁。
- 3) 永暦二年五月日付「紀伊国在庁官人等陳状案」(『平安遺文』3153号)「…去年八月為大風洪水、被押流穿堰ロ巳如淵、其流難登得、(中略) 本堰ョリ上へ登テロ一段長二町余也、本堰ノ跡ニ所掘落也…」
- 4)額田雅裕「太田城付近の地形環境」『和歌山市立博物館研究紀要』2,1987,24~41頁。
- 5) 薗田香融「岩橋千塚と紀伊国造」末永雅雄他編『岩橋千塚』和歌山市教育委員会,1967,506~537頁。
- 6) 小山靖憲「中世の宮井用水について」『中世村落と荘園絵図』東京大学出版会, 1987, 214~230頁。
- 7) 中野榮治「名草郡の条里」『紀伊国の条里制』古今書院,1989,113~166頁。
- 8) 小賀直樹他『近畿自動車道和歌山線関係遺跡第1次発掘調査概報』和歌山県教育委員会,1970。 小賀直樹・吉田宣夫『昭和45年阪和高速道路遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会,1971。
- 9)吉田宣夫他『日本道路公団近畿自動車道和歌山線埋蔵文化財調査報告』和歌山県教育委員会,1972。 吉田宣夫他『鳴神地区遺跡発掘調査概報』 I · II ,和歌山県教育委員会,1979。
- 10) 額田雅裕「和泉山脈と和歌山平野」和歌山地理8,1988,11~24頁。

(2)鳴神 Ⅴ遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所 松田 隆二

1. はじめに

鳴神V遺跡では、平成5年度の発掘調査において、古墳時代前期の土層から8区画の水田遺構が1列に連なって検出された。この調査は、プラント・オパール分析を用いて、同遺構における稲作の検証、およびその他の層における稲作跡の探査を試みたものである。

2. 試料

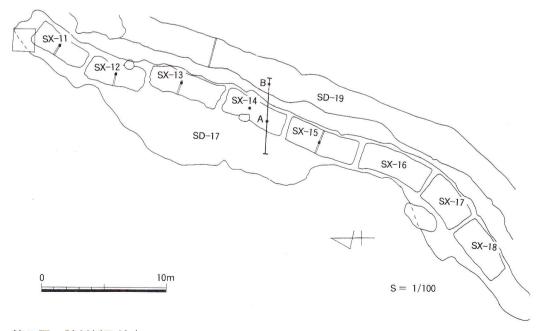
試料は、まず、遺跡の調査担当者によって採取され当研究所に送付されてきた I 区のSX-11、SX-12、SX-13、SD-17、SX-14、次に、当研究所所員が現地において直接採取を行った II 区北壁 A 地点の 4 層上部、 4 層下部、 5 層、 6 層(SD-17)、 7 層(SX-14)、 8 層、同 B 地点のSD-19 およびSX-15の13点である。第45図に試料採取地点を、第46図に土層断面図と分析試料の採取箇所を示す。

3. 分析法

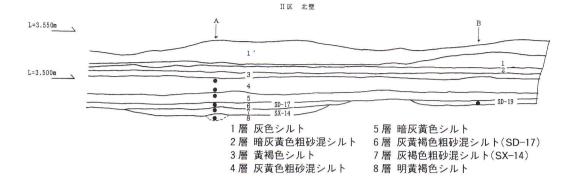
プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm,約0.02g) ※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット) 中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡•計数

検鏡は、おもに機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと



第45図 試料採取地点



第46図 土層断面図と分析試料の採取箇所

略す)を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料 1 g 中のプラント・オパール個数(試料 1 g あたりのガラスビーズ 個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。

4. 分析結果

試料1g中のプラント・オパール個数を表1に示す。なお、イネに関してはダイアグラムにして第47図に示した。巻末に主な分類群の顕微鏡写真を示す(図版47)。

採取された試料すべてについて分析を行った結果、イネは I 区のSX-14、II 区北壁の 4 層上部と下部、5 層、7 層(SX-14)およびSX-15において検出された。このうち、4 層では高い密度である。 3 シ属は II 区北壁の 4 層下部とSX-15の 2 試料のみから検出されたがいずれも低い密度である。 3 ケ亜科はすべての試料から検出されたが、3 II 区北壁の 4 層上部を除けばいずれも低い密度である。 3 ウシクサ族は 3 区の3 区 3

5. 考察

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ3,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

検出された水田遺構からは、SX-11、SX-12、SX-13、SX-14、SX-15の 5 区画について 分析を行った。このうち、イネのプラント・オパールが検出されたのはSX-14とSX-15の 2 区画のみである。プラント・オパール密度はいずれも1,800個/gとやや低い値である。ただし、水田遺構を覆うSD-17からはイネのプラント・オパールが検出されていないことから、上層から

試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
ΙK					
SX-11	0	0	700	0	0
SX-12	0	0	700	0	0
SX-13	0	0	700	0	0
SD-17	0	0	500	500	0
SX-14	500	0	500	500	0
II 区北壁 A					
4 - 1	7,700	0	7,100	0	0
4 - 2	5,500	600	2,400	0	0
5	2,900	0	2,900	0	0
6 (SD-17)	0	0	2,200	0	0
7 (SX-14)	1,800	0	2,400	0	0
8	0	0	2,000	0	0
II 区北壁 B					
SD-19	0	0	1,300	0	0
SX-15	1,800	600	3,100	600	0

表1 試料1g中のプラント・オパール 個数(単位:個/g)

の混入の危険性は考えにくい。したがって、水田遺構が検出され、そこからイネのプラント・オパールが検出されたという事実から、少なくとも同遺構においては稲が栽培されていたものと考えられる。なお、プラント・オパール密度が低いことに関しては、ここでの原因は明確ではないが以下のようなことが考えられよう。すなわち、①稲作が行われていた期間が短かった、②稲藁の大部分が水田外に持ち出されていた、③稲の生産性が低かった、④後代に耕作土が削平されてしまったなどである。

同遺構以外では、4層と5層においてイネのプラント・オパールが検出されたことから、これらの層においても稲作が行われていた可能性が考えられる。とくに、4層ではプラント・オパール密度が上部で7,700個/g、下部でも5,500個/gと非常に高い値である。したがって、同層においては稲作が行われていた可能性が極めて高いと考えられる。

6. まとめ

鳴神V遺跡においてプラント・オパール分析を行い、検出された水田遺構での稲作の検証とその他の層での稲作跡の探査を試みた。その結果、古墳時代前期の水田遺構からイネのプラント・オパールが少量ではあるが検出されたことから、同遺構で稲が栽培されていた可能性が認められた。また、その他の層では4層と5層において稲作が行われていた可能性が推定された。とくに、4層ではプラント・オパールが高い密度で検出されたことにより、その可能性が極めて高いと判断された。

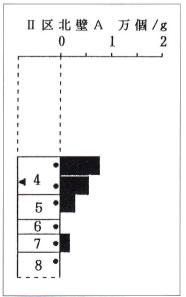
※補足

SX-11、SX-12、SX-13の3区画からはイネのプラント・オパールは検出されなかった。これらの試料については、いずれも当研究所へ送付されてきたものであることから、あるいは試料採取の時点で手違いがあったかも知れない。試料の採取にあたっては、十分に注意を払うことが重要であるが、可能なかぎり専門調査員が直接現地調査を行うことが望ましい。

参考文献

杉山真二・藤原宏志(1987)川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オ バール分析.赤山-古環境編-.川口市遺跡調査会報告,10:281-298.

- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ 科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-.考古学と自然科学,9:15-29. 藤原宏志(1979)プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)-福岡・板
- 腰原宏志(1979)プラント・オハール分析法の基礎的研究(3)ー備画・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O.sativa L.)生産総量の推定一.考古学と自然科学,12:29-41.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) ープラント・オパール分析による水田址の探査ー. 考古学と自然科学, 17:73-85.



第47図 イネのプラント・ オパールの検出状況

(注) **◀**印は50cmのスケール、• 印は 分析試料の採取箇所

(3)鳴神 Ⅴ遺跡における花粉分析

天理大学附属天理参考館 金原 正明 古環境研究所 金原 正子

1. はじめに

花粉分析は、従来、湖沼などの堆積域および集水域の大きな堆積物を対象とし、広域な森林変遷を主とする時間軸の長い植生と環境の変遷を解析する手法である。考古遺跡では、そのようなやや広域な水成の堆積物以外に、埋没土や遺構内堆積物などの堆積域が限定された生成の異なる堆積物も対象となる。これらからは狭い植生や短い時間を反映することも指摘されており(金原、1993)、植物種による花粉生産量の異なりや堆積要因によって植生や環境の復原精度が異なる。また、土壌堆積物、乾田・畠土壌などの乾燥的な陸成の堆積物分解によって花粉などの植物遺体が分解を受けていることも多く、復原を困難とならしめている。ここでは以上の点に留意して分析を行った。

2. 試料

試料はSX11・12・13の3地点の堆積物で、いずれもシルトを主とするやや淘汰の悪い堆積物で、明らかな水成堆積物ではなく、土壌生成作用を受けつつ生成された堆積物とみなされる。

3. 方法

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を 行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗いした後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎)を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石灰酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm 2 分間の遠心分離を行った後上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、所有の現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン(一)で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群として示した。イネ属に関しては、中村(1974、1977)の検討を踏まえ、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類したが、個体変化や類似種も存在するため、イネ属型とした。

4. 結果と所見

検出された花粉・胞子は、樹木花粉 8、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉13、シダ植物胞子2 形態の計22分類群であった。結果は花粉遺体一覧として表にまとめた。花粉総数が200個以上に達しなかったため花粉組成図は作成できなかった。なお、主要な分類群は写真に示し

たが、花粉量が少なく痛んでいるものが多く良好には示しえなかった(図版48)。

同定された分類群は以下のとおりである。

「樹木花粉〕

マツ属複維管東亜属、コウヤマキ、スギ、カバノキ属、クリーシイ属、コナラ属コナラ亜属、 コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科

[草本花粉]

オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ 科、シソ科、セリ科、キク亜科、タンポポ亜科、コモギ属

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

検出された花粉数が少ないため明らかな推定はしづらいが、一応の傾向をみることはできる。 まず、花粉数が少なく写真に示したように痛んでおり、試料となった堆積物が分解を受ける環境 で生成または保存されたことがわかり、風化作用や土壌生成作用をやや強く受けたと考えられる。 このことから試料となった堆積物はやや乾燥した土壌であったとみなされよう。花粉分析結果で もヨモギ属やキク亜科などの乾燥を好む草本が多く矛盾しない。イネ属型花粉に加えオモダカ属 やミズアオイ属などの水湿地植物も少量検出されており水湿地環境も持ち合わせているといえる。 このことから堆積物が生成された環境が乾湿を持ち合わせていたことが示唆でき、すなわち引水 によって一次的に水湿地化する表面水型土壌である乾田が想定される。

他にSX13でアブラナ科花粉がある程度出現しており、アブラナやダイコン類などの畠が営まれていた可能性がある。

周囲の環境であるが、ヨモギ属・キク亜科の乾燥を好む草本が多く繁茂する乾燥地であり、樹木はかなり少なかったとみなされる。試料によってはコナラ属コナラ亜属がやや多い傾向があり、コナラ属コナラ亜属は植生の破壊後に途中相として生える性格もあることから、周囲には二次林としてのコナラ属コナラ亜属が疎林または孤立林として生えていたと推定される。

参考文献

中村純(1973) 花粉分析, 古今書院.

金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店.

中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(Oryza sativa)を中心として、第四紀研究 13

中村純(1977)稲作とイネ花粉、考古学と自然科学 第10号.

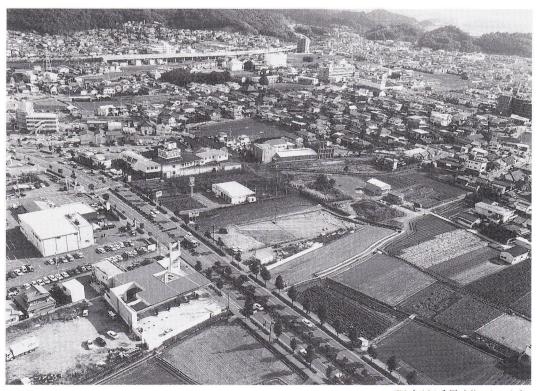
分類群	試料			
学名	和名	SX11	SX12	SX13
Arboreal pollen	木本花粉			
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属			1
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ		1	1
Cryptomeria japonica	スギ	1	1	
Betula	カバノキ属			1
Castanea-Castanopsis	クリーシイ属	1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	1	2	8
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属		1	1
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属ーケヤキ	1		
Arboreal Nonarboreal	木本・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科ーイラクサ科	1		1
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Sagittaria	オモダカ属			1
Gramineae	イネ科	17	8	19
Oryza type	イネ属型	1	1	7
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2	1	4
Monochoria	ミズアオイ属			1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科―ヒユ科			1
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1		
Cruciferae	アブラナ科			12
Umbelliferae	セリ科			2
Labiatae(3-colpate)	シソ科			3
Lactucoideae	タンポポ亜科	2		2
Asteroideae	キク亜科	7	1	7
Artemisia	ヨモギ属	19	5	12
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	14	7	17
Trilate type spore	三条溝胞子	36	16	20
Arboreal pollen	樹木花粉	4	5	12
Arboreal · Nonarboreal	木本·草本花粉	1	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	49	16	71
Total pollen	花粉総数	54	21	84
Unknown pollen	未同定花粉	3	0	1
Fern spore	シダ植物胞子	50	23	37

表 2 花粉分析結果

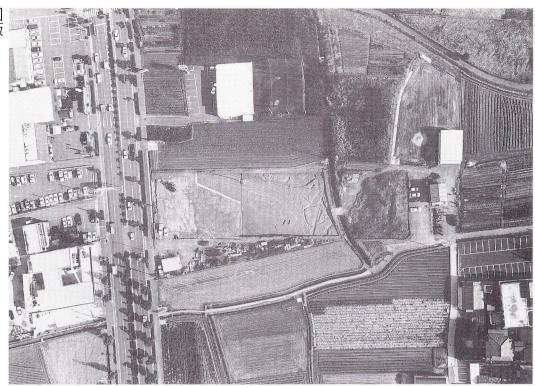
図 版



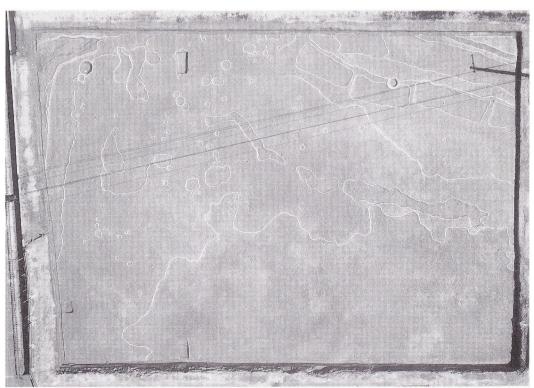
調査前の状況(北から)



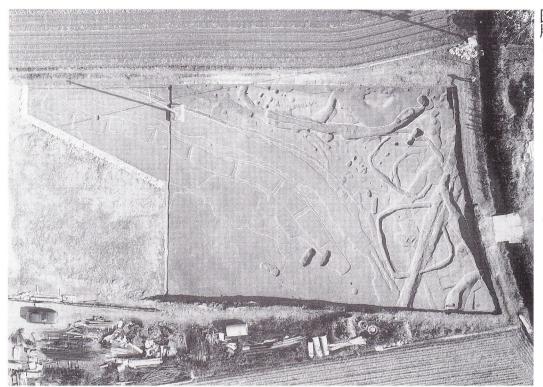
調査地近景(北西から)



調査地全景(左が北)



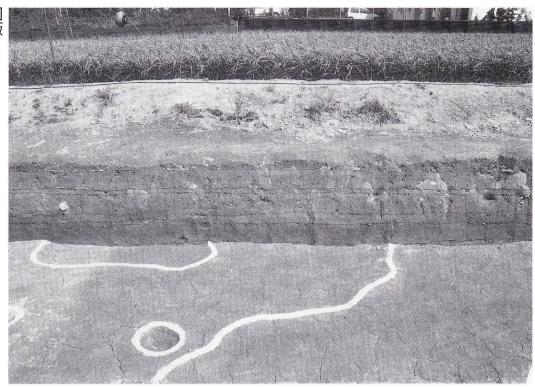
I区 全景(左が北)



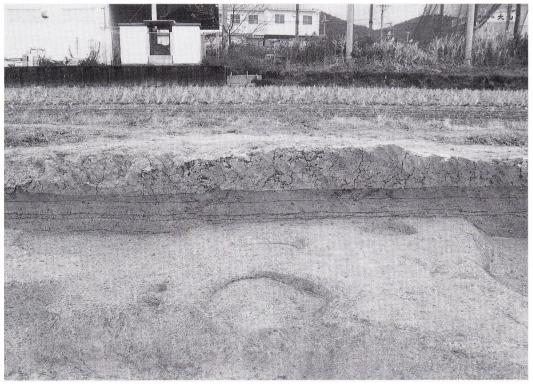
II区 全景(左が北)



Ⅲ区 全景(南から)



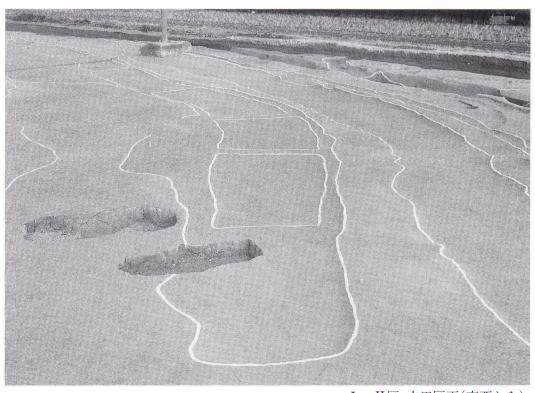
I区 東壁土層堆積状況(西から)



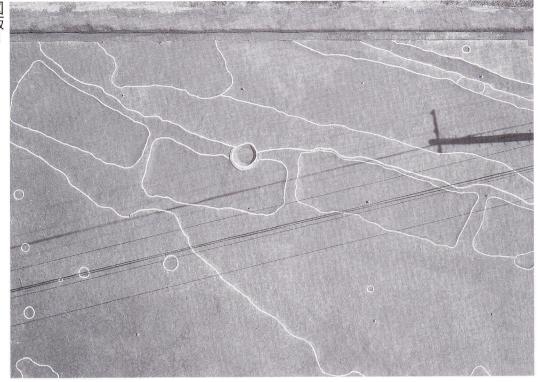
II区 東壁土層堆積状況(西から)



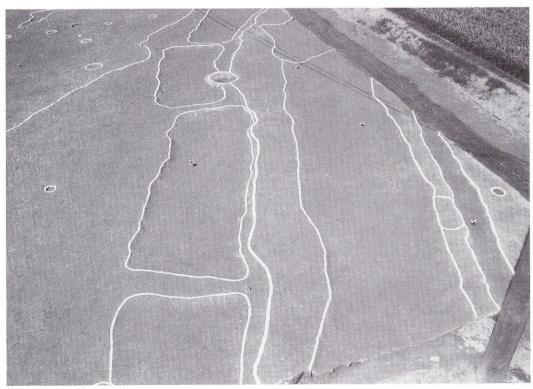
I・II区 水田区画(右が北)



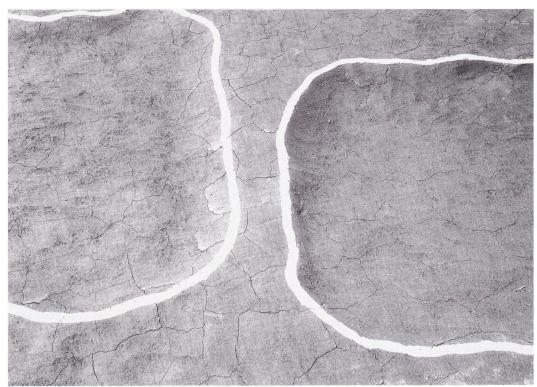
I・II区 水田区画(南西から)



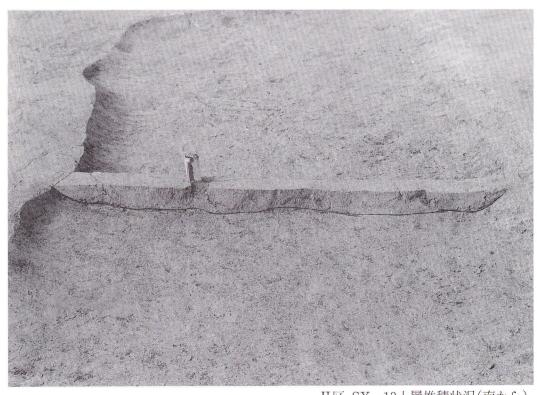
I区 水田区画(左が北)



I区 水田区画(南西から)



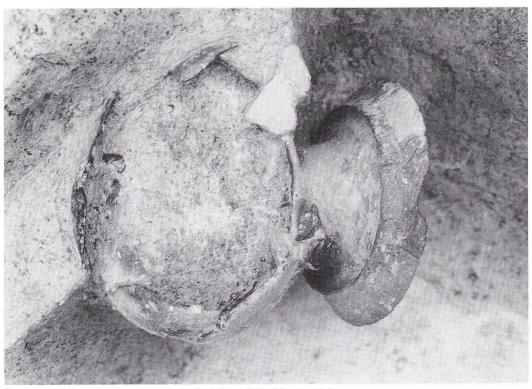
II区 SX−11~12間畦畔(東から)



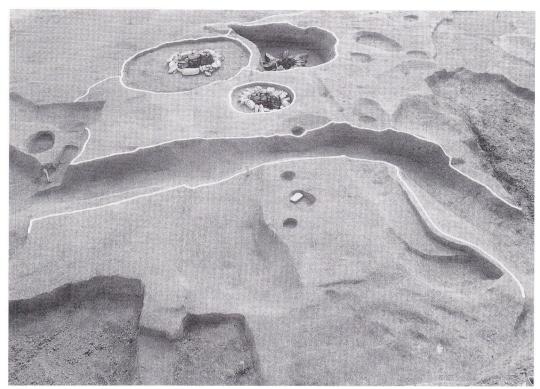
Ⅱ区 SX-13土層堆積状況(南から)



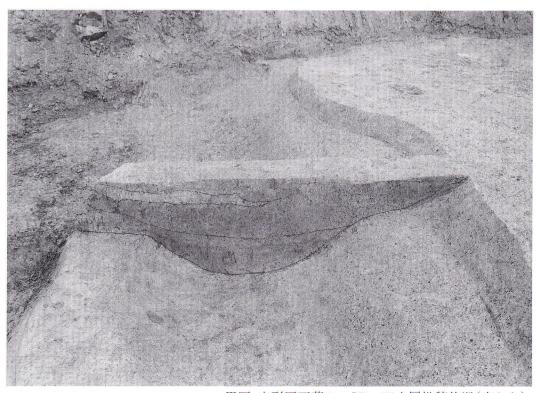
II区 方形区画墓群(上が北)



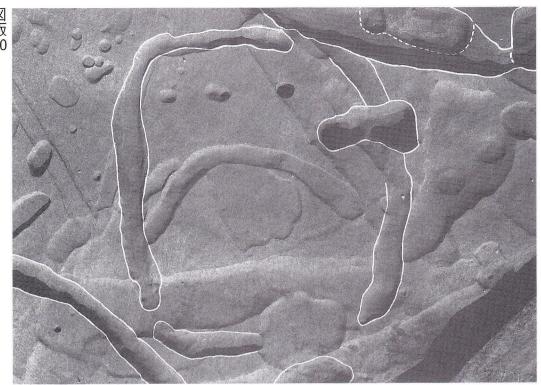
II区 方形区画墓1・SD-29内遺物出土状況(北西から)



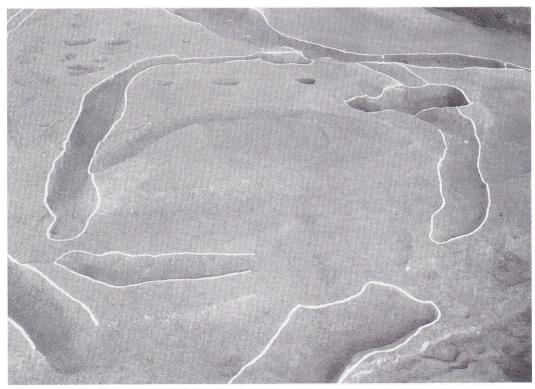
III区 方形区画墓1 · SD-55(北から)



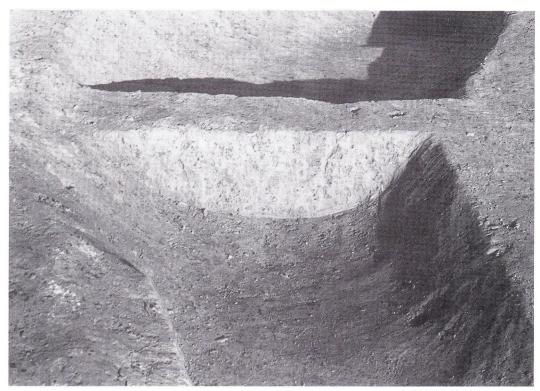
Ⅲ区 方形区画墓1・SD-55土層堆積状況(南から)



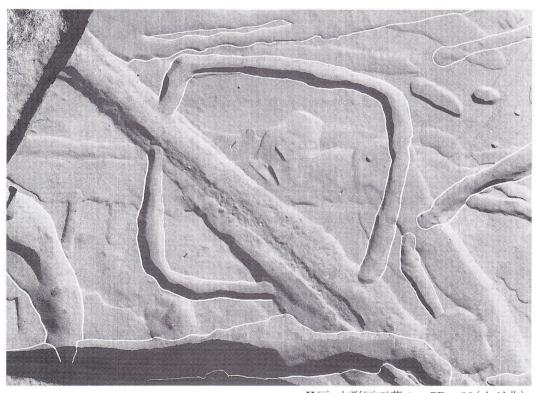
II区 方形区画墓3・SD-40(左が北西)



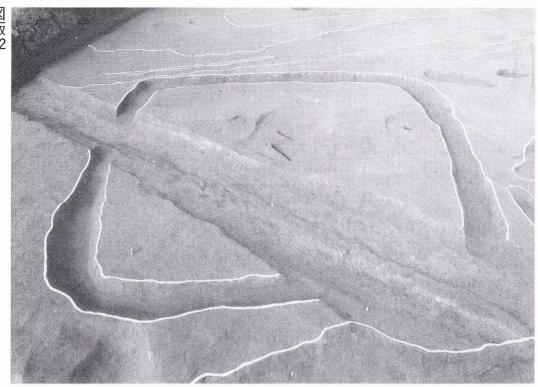
Ⅱ区 方形区画墓3・SD-40(南西から)



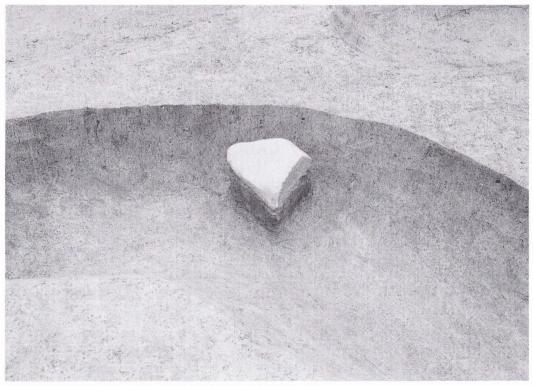
II区 方形区画墓 3・SD-40土層堆積状況(西から)



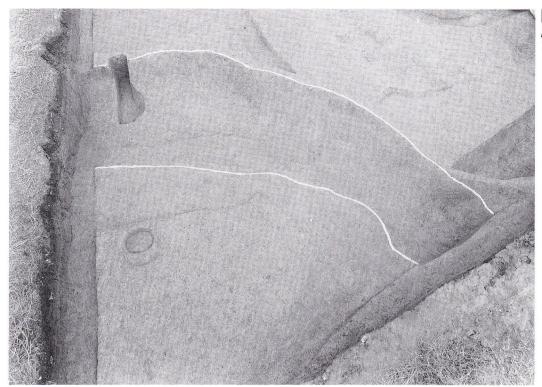
II区 方形区画墓4・SD-32(上が北)



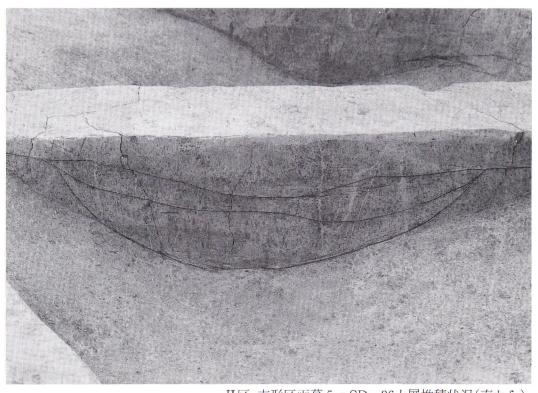
II区 方形区画墓4 ・SD-32(南から)



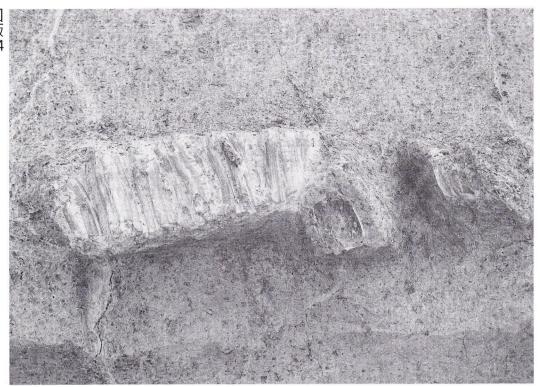
II区 方形区画墓4・SD-32内遺物出土状況(南から)



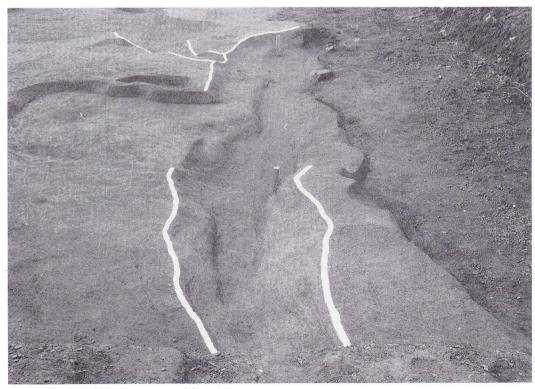
II区 方形区画墓5・SD-36(南から)



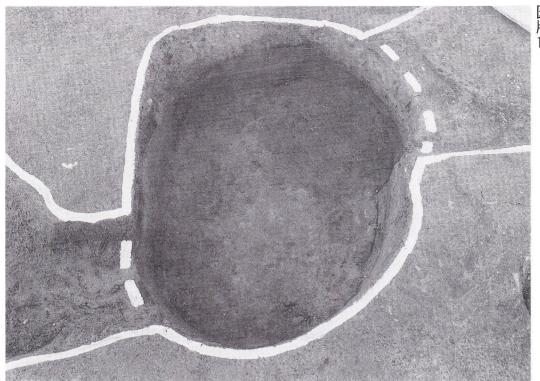
II区 方形区画墓 5・SD-36土層堆積状況(南から)



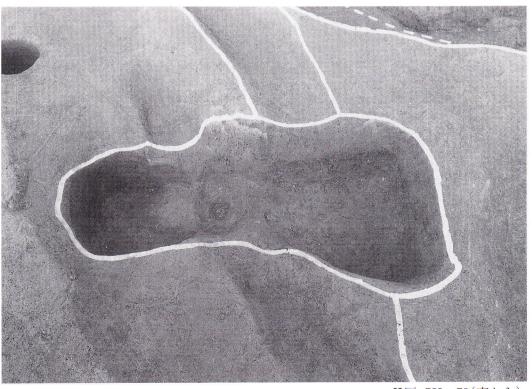
II区 方形区画墓5・SD-36内遺物出土状況(北から)



Ⅲ区 方形区画墓6・SD-54(東から)



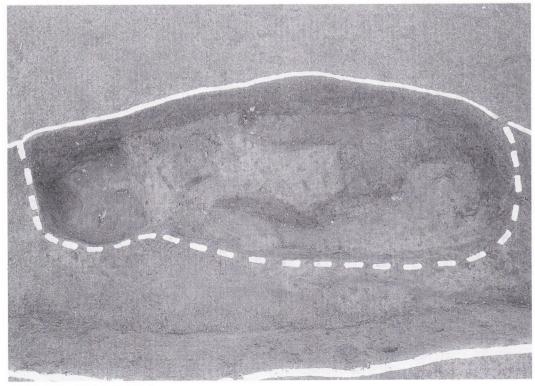
II区 SK-74(南から)



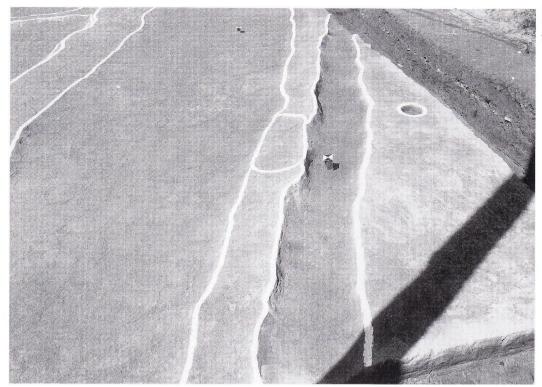
II区 SK-79(南から)



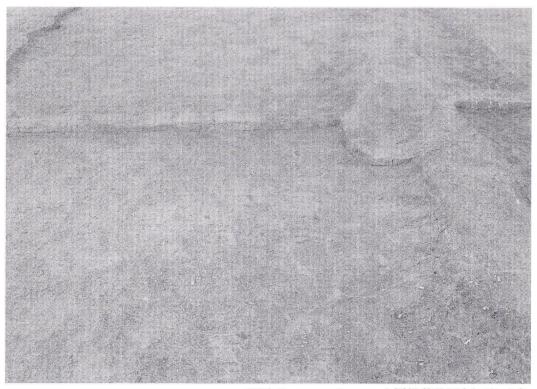
II区 SK-79土層堆積状況(南東から)



II区 SK-81(南西から)



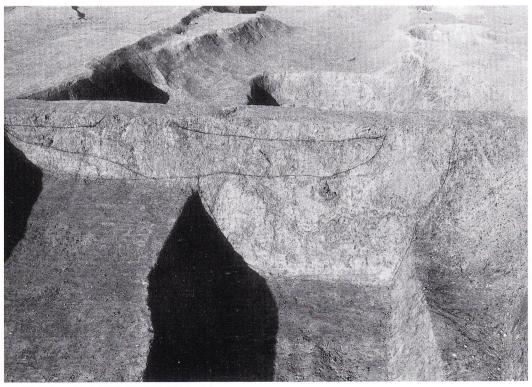
I区 SD−18、SD−19(南西から)



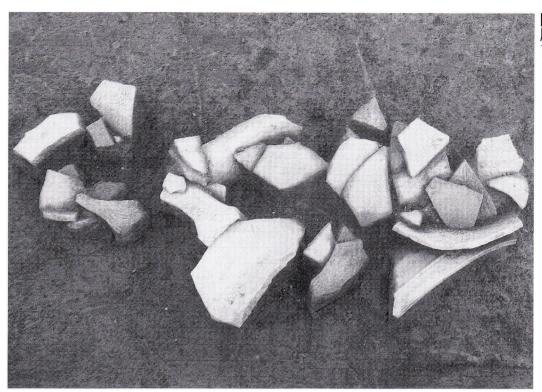
II区 SD-18、SD-19土層堆積状況(南西から)



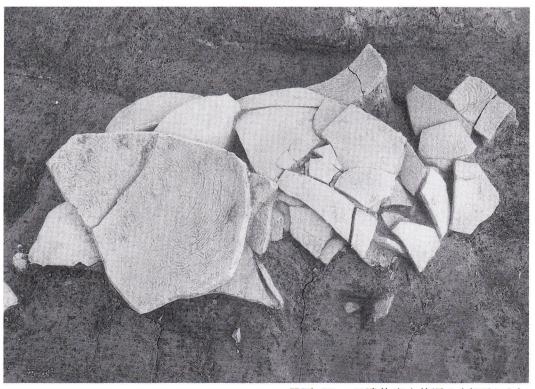
II区 SD-46(左が北)



II区 SD-46土層堆積状況(南から)



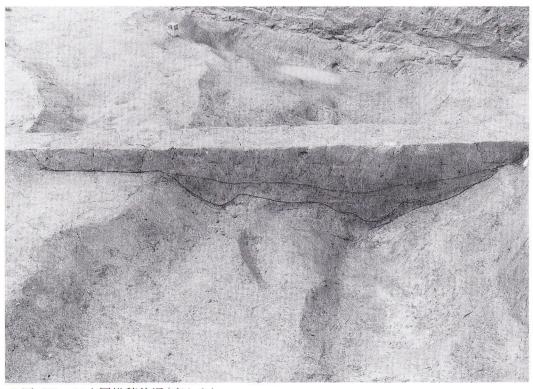
II区 SD-46遺物出土状況 1 (南西から)



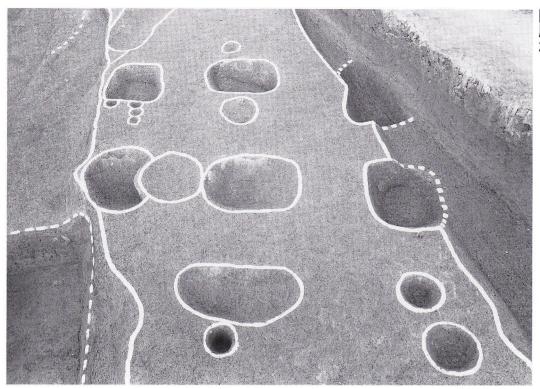
II区 SD-46遺物出土状況 2 (南西から)



I区 SD−12(北から)



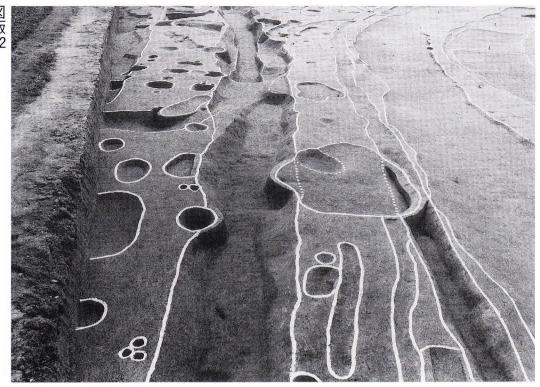
I区 SD−12土層堆積状況(南から)



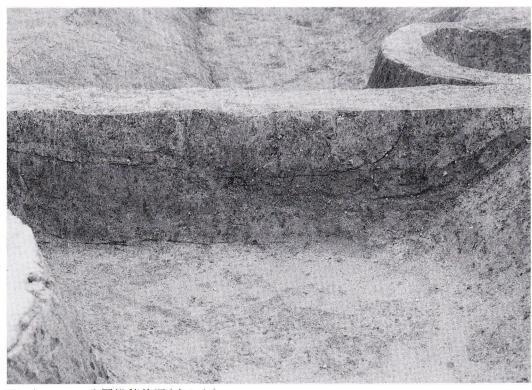
II区 掘立柱建物・ピット群(南から)



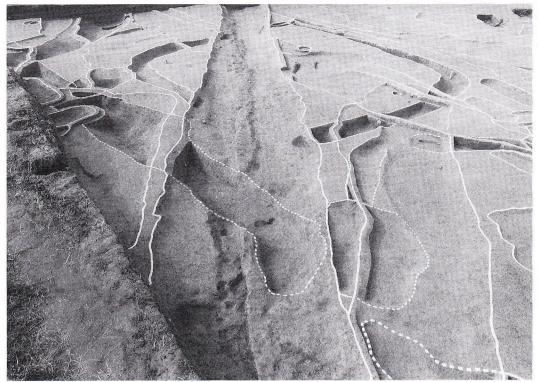
II区 掘立柱建物・ピット群 土層堆積状況(南から)



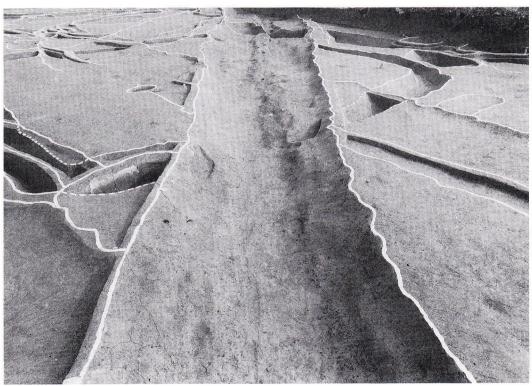
II区 SD-39(北から)



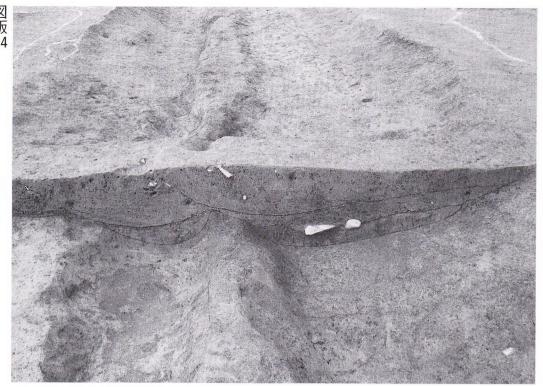
II区 SD-39土層堆積状況(南から)

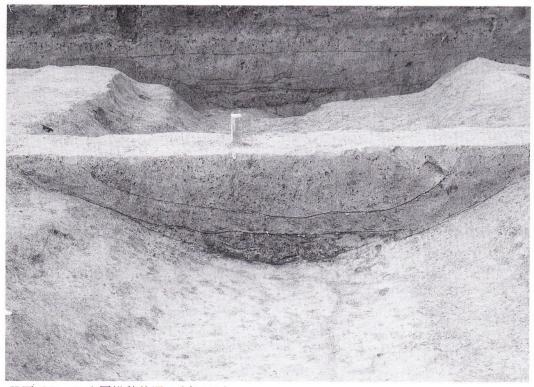


II区 SD-20(東から)

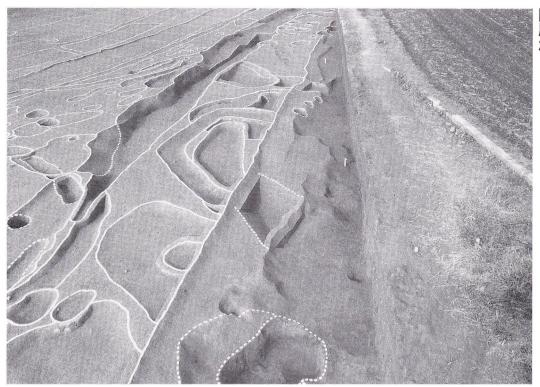


II区 SD-20(西から)

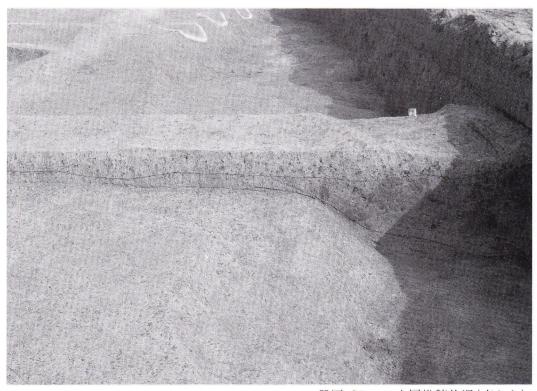




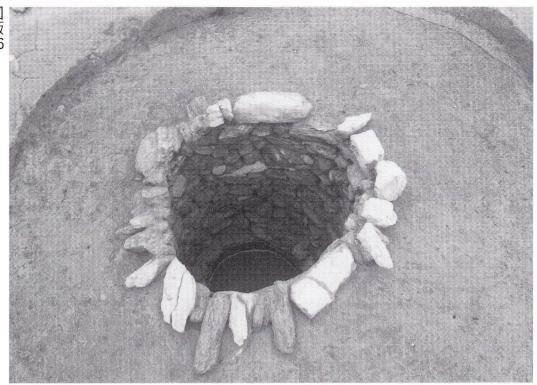
II区 SD-20土層堆積状況 2 (東から)



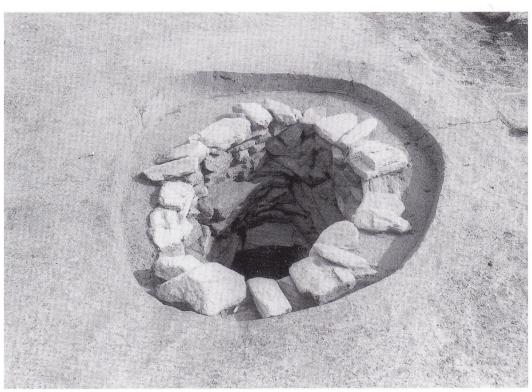
II区 SD-27(南から)



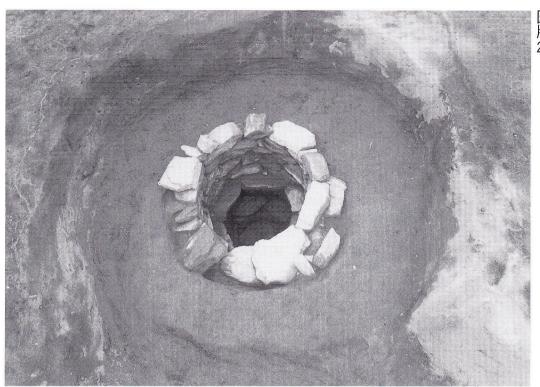
II区 SD-27土層堆積状況(南から)



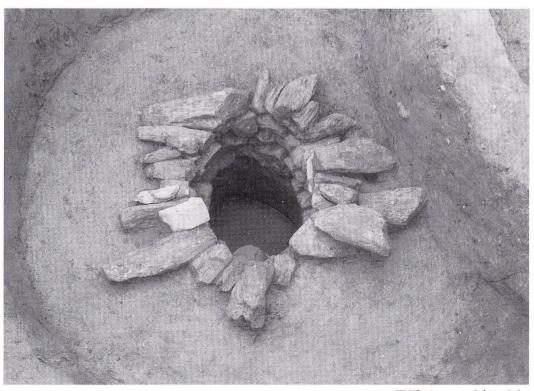
III区 SE-01(南から)



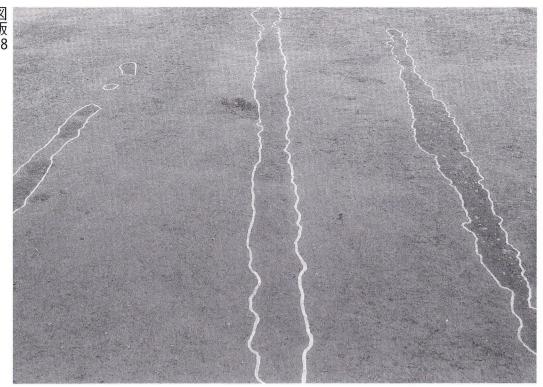
III区 SE-02(西から)



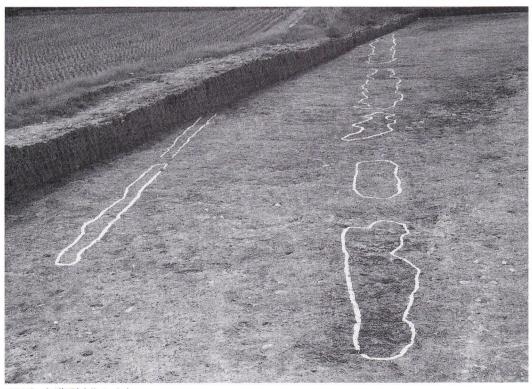
III区 SE-04(東から)



III区 SE-05(南から)



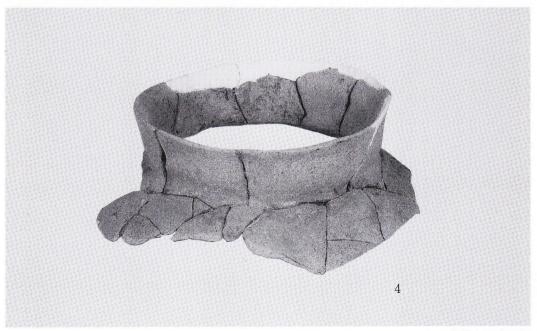
I区 小溝群(北から)



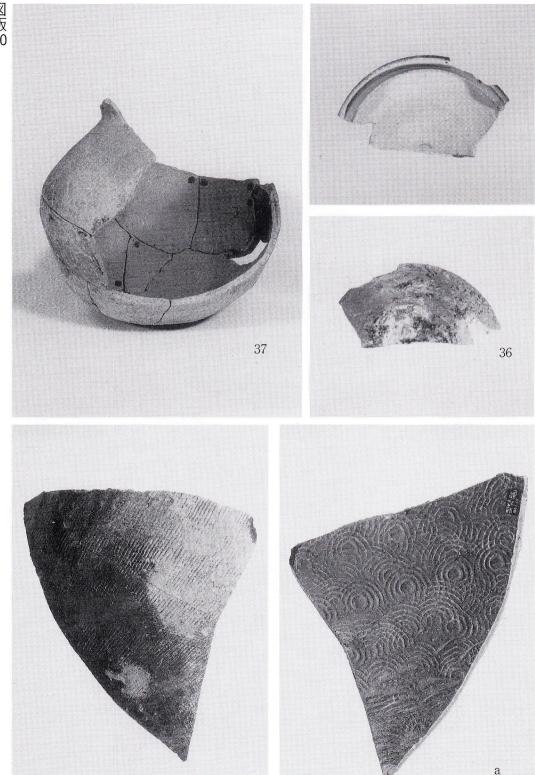
II区 小溝群(北から)



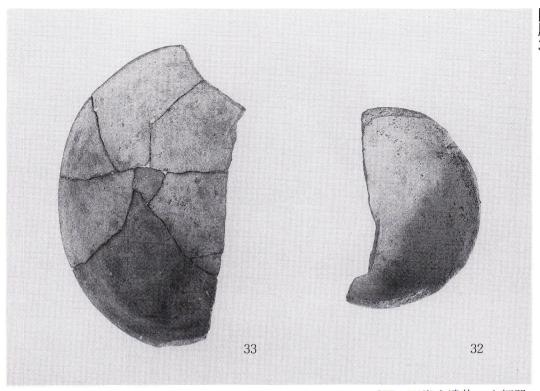
SD-29出土遺物 土師器



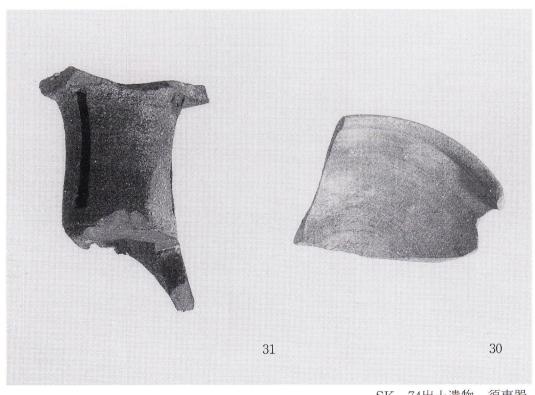
SD-36出土遺物 土師器



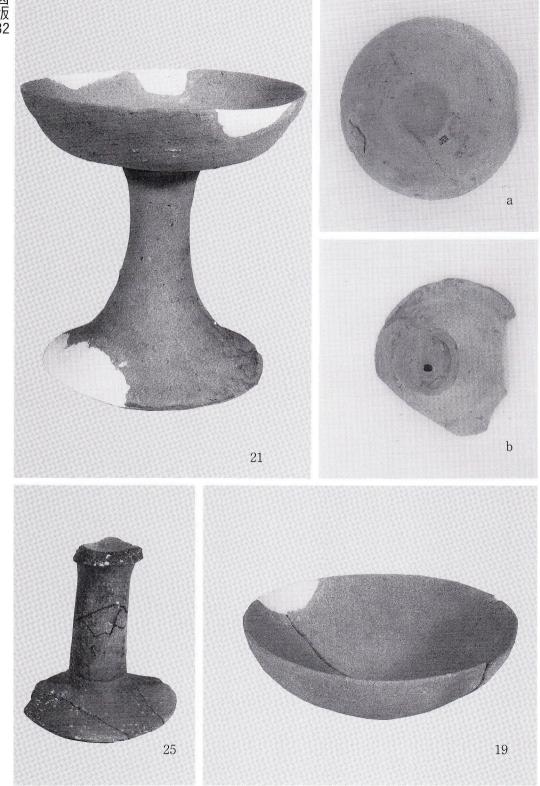
SK-73出土遺物 須恵器



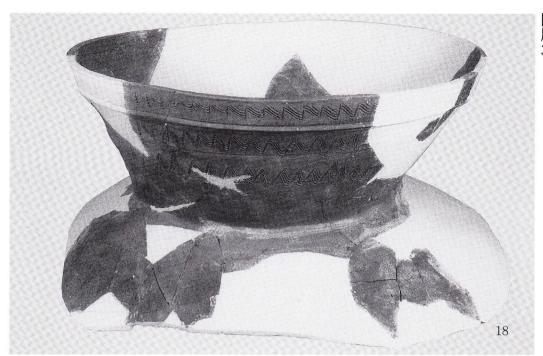
SK-74出土遺物



SK-74出土遺物 須恵器



SD-46出土遺物 土師器

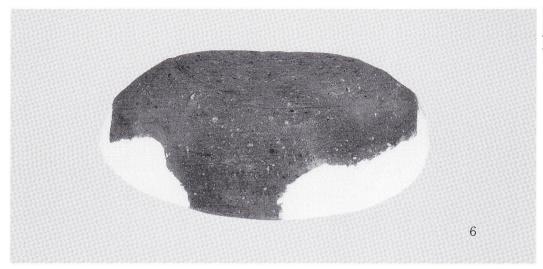


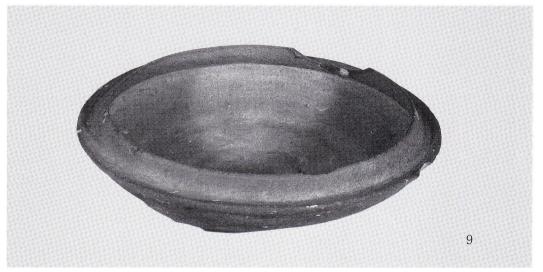
SD-46出土遺物 須恵器

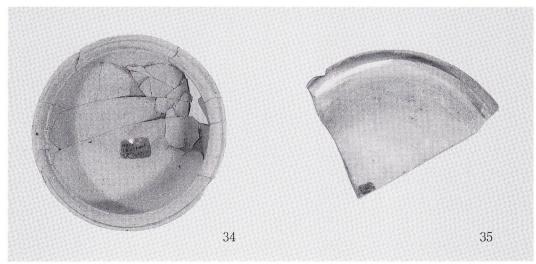


SD-46出土遺物 須恵器

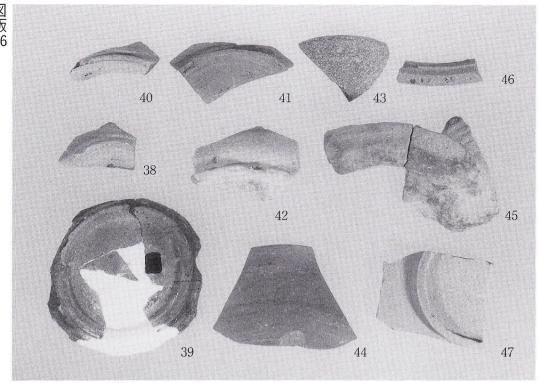
SD-46出土遺物 須恵器



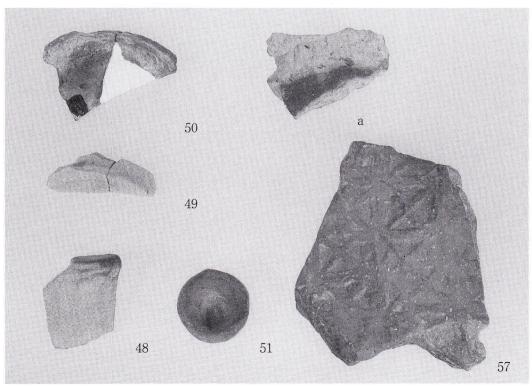




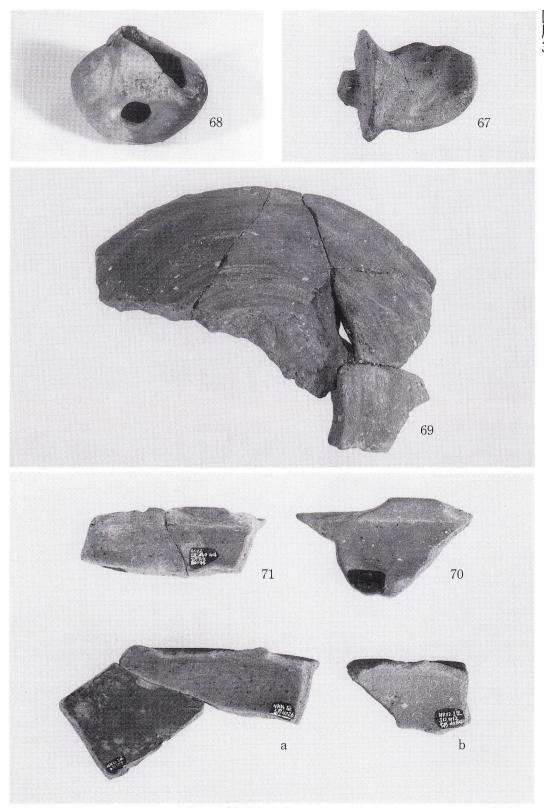
6 · 9 SD-46出土遺物 須恵器、34 · 35 SD-12 出土遺物 須恵器



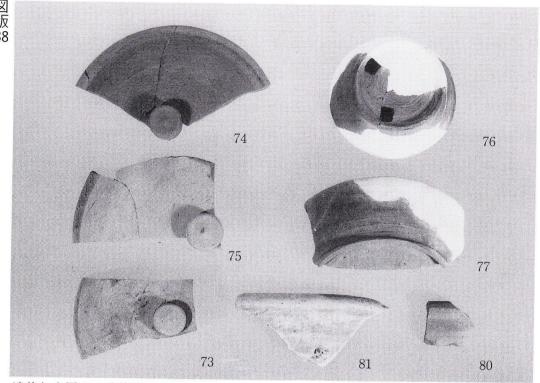
SD-39出土遺物 38~46須恵器、47灰釉陶器



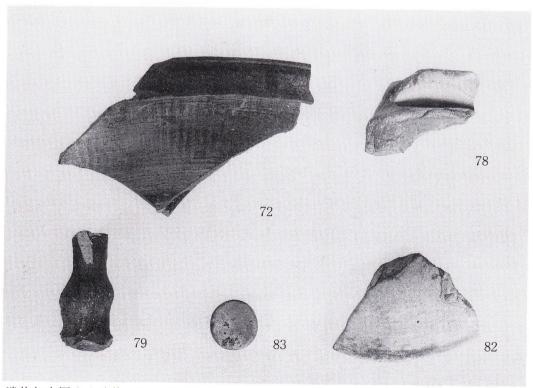
SD-39出土遺物 48土師器、49・50黒色土器、51手づくね土器、57・a 瓦



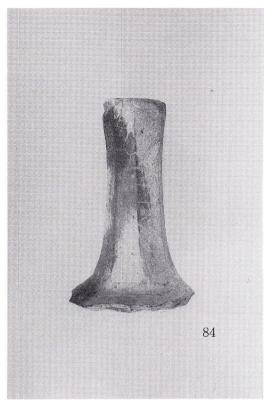
遺物包含層出土遺物 67・68土師器、69~71・a・b 須恵器

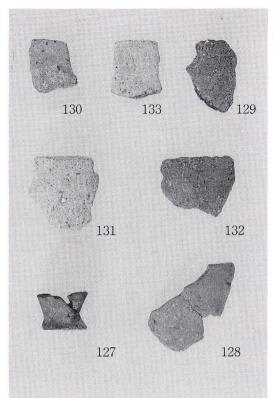


遺物包含層出土遺物 須恵器



遺物包含層出土遺物 72・78・79須恵器、82・83土師器



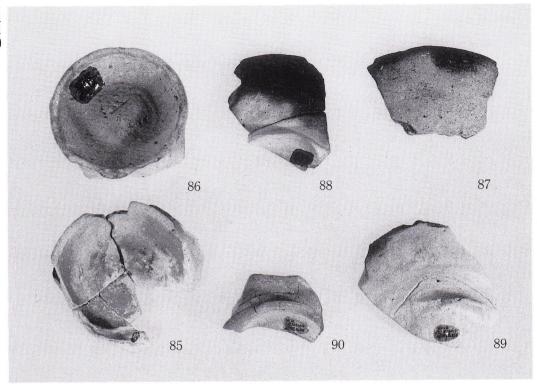




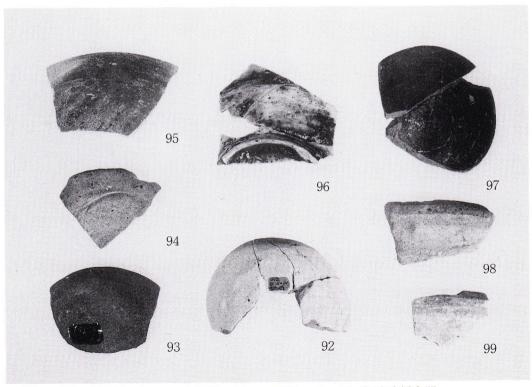




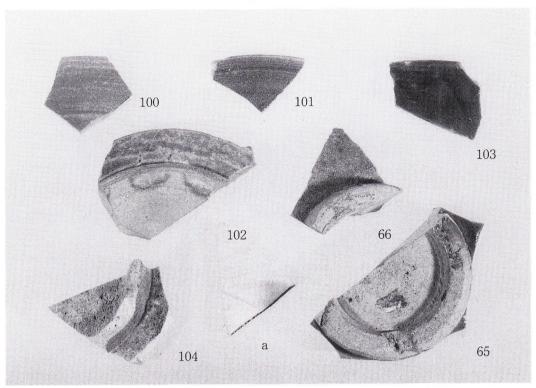
遺物包含層出土遺物 84・91土師器、127~133製塩土器



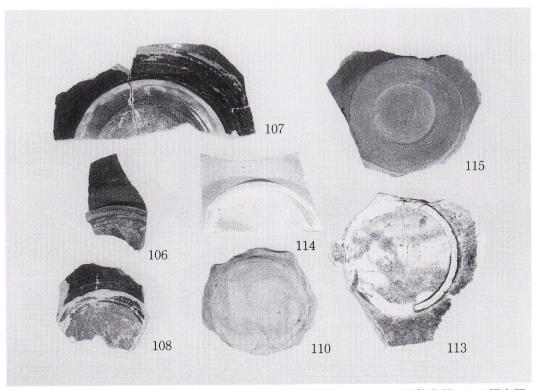
遺物包含層出土遺物 85・86土師器、87~90黒色土器



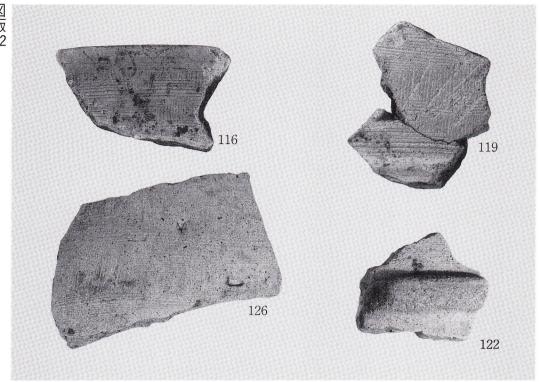
遺物包含層出土遺物 92~94土師器、95~97瓦器、99・100東播系須恵器



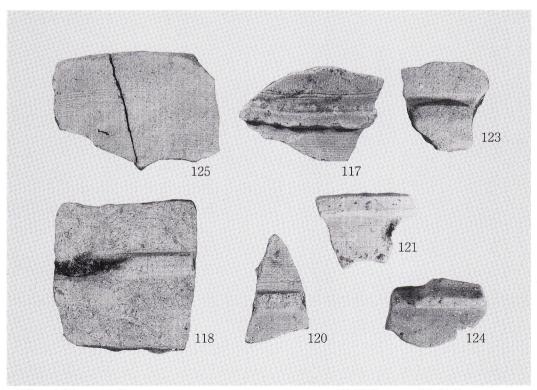
100~104・a 遺物包含層出土遺物 100~103青磁、104・a 白磁、65 SD−20出土遺物 青磁、66 SD−27出土遺物青磁



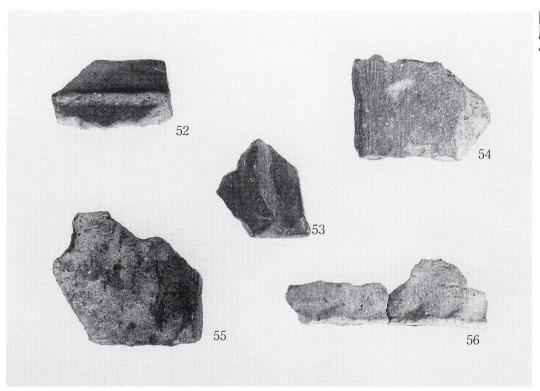
遺物包含層出土遺物 106~108·110緑釉陶器、113·114灰釉陶器、115須恵器



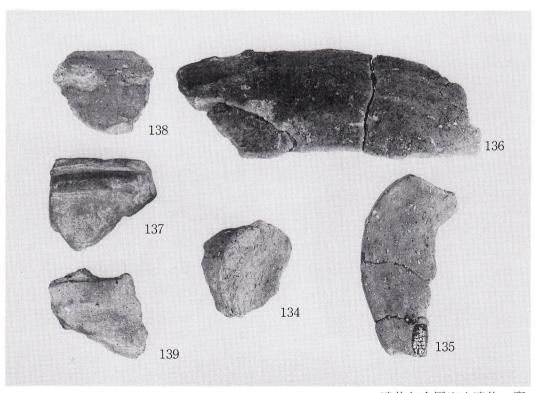
SD-12出土遺物 円筒埴輪



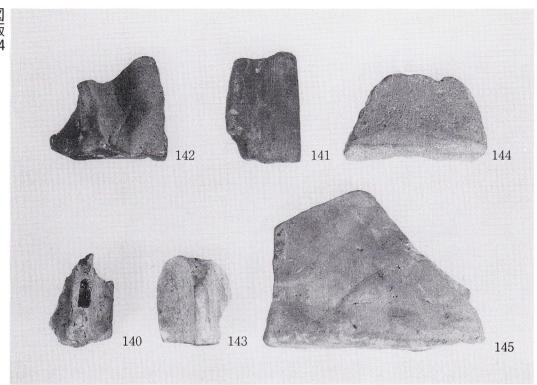
遺物包含層出土遺物 117·118·120·121·123·125円筒埴輪、124形象埴輪



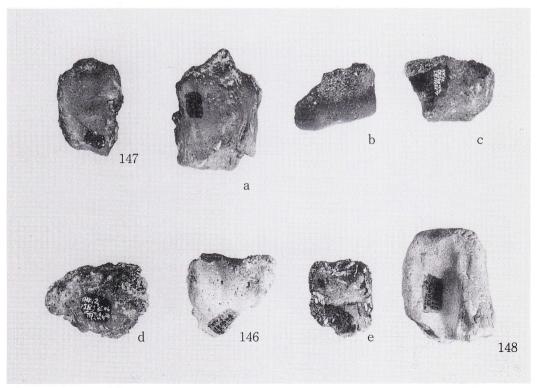
遺物包含層出土遺物 竈



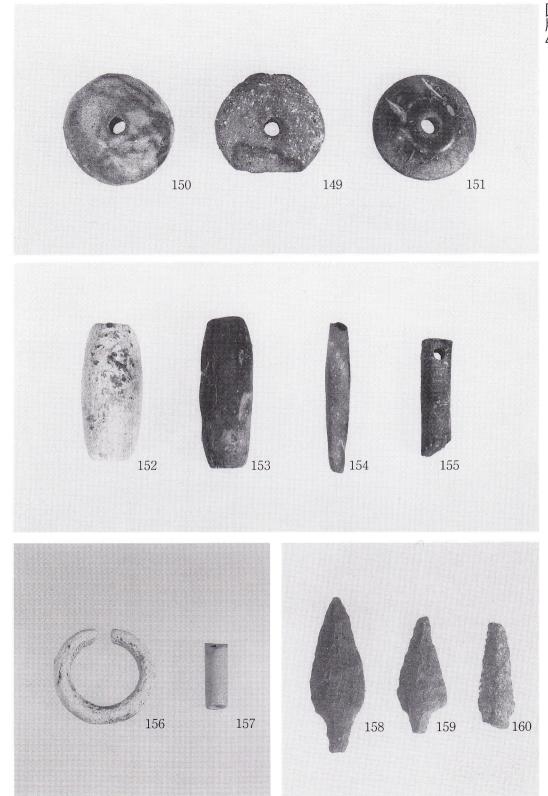
遺物包含層出土遺物 竈



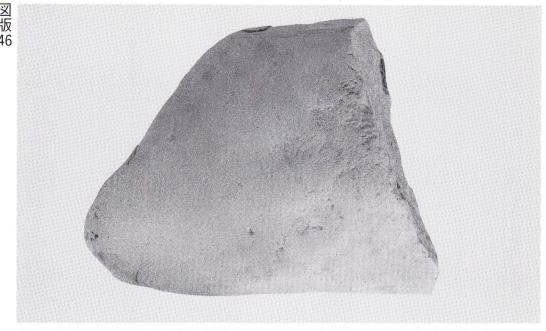
遺物包含層出土遺物 竈

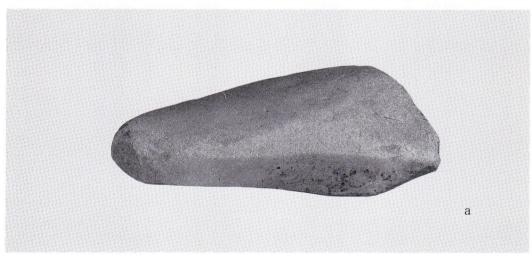


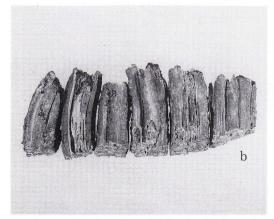
遺物包含層出土遺物 フイゴ

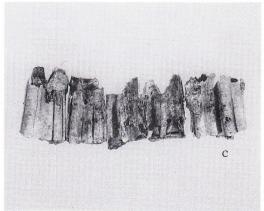


遺物包含層出土遺物 149~151紡錘車、152~155土錘、156耳環、157管玉、158~160石器

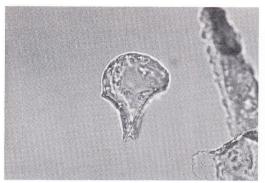


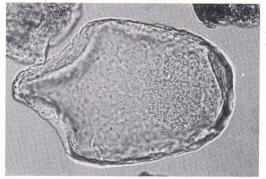




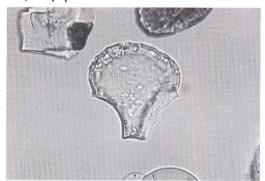


a SD-32出土遺物 砥石、b SD-36出土遺物 馬歯、c SD-54出土遺物 馬歯

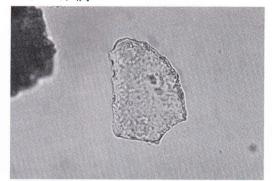




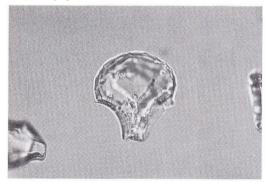
1 イネ



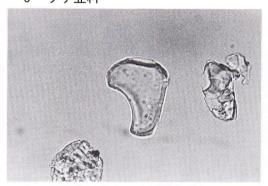
4 ヨシ属



2 イネ



5 タケ亜科



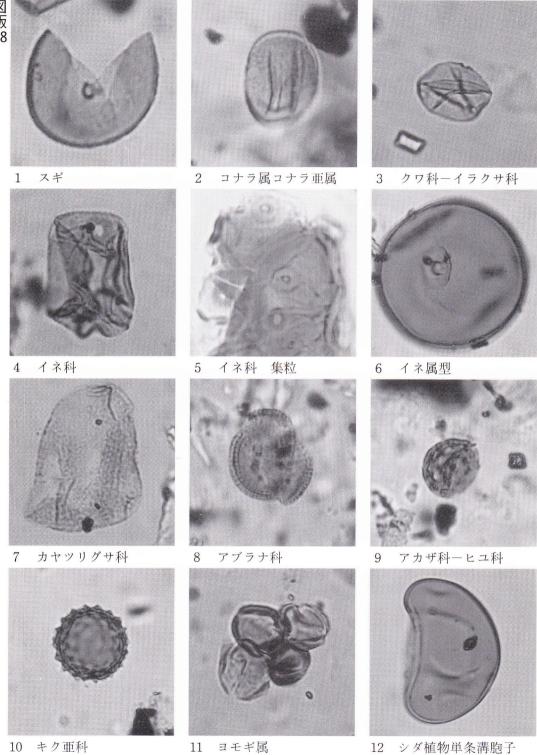
3 イネ

6 ウシクサ族(スズキ属など)

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

(倍率はすべて約250倍)

No.	分 類 群	地点	試料名
1	イネ	ΙΙ区	4 - 1
2	イネ	II 🗵	5
3	イネ	\mathbb{H}	SX-14
4	ヨシ属	II 🗵	SX-15
5	タケ亜科	II 🗵	4 - 1
6	ウシクサ族(ススキ属など)	ΙX	SX-14



_____ 30 μ m

平成6年3月31日発行

鳴神 V 遺跡 発掘調査概要報告書

和歌山市西汀丁29番地

印 刷 西岡総合印刷株式会社

© 財和歌山市文化体育振興事業団 1994